
うらやま

マーカス K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うらやま

【著者名】

NZマーク

マーカスK

【あらすじ】

大学の夏休み。連日田舎の同級生と飲んだくれていた俺は、ある朝起きてみると見知らぬ場所に。いや、よくよく辺りを見回してみると、ガキのころよく遊んだ裏山だ。対岸には異常に無口な同級生が。俺はここから出れんのか？

第一話

タンクトップとハーフパンだからか、知らないうちに虫に刺されたみたいでアチコチ痒い。通気性と機動力を重視するのが夏における俺のファッショングの定番なんだけど、と一ぜん、山登りには向くわけない。山つていつもそんなちゃんとした山じゃなくて俺らん中ではドラエモンに出てくる裏山みたいに思いつきつお手軽感があつたから「ドラ山」なんて呼ばれてたのは小学校二、三年の間だけで、しかも俺以外でその呼び方してたのは田中と鈴木ぐらいで、つまり…まったく流行んなかった。

そんな、小っちゃいころから登りなれている、まあ登るつてほど意識もなかつたけど、裏山に昨日の深夜未明からいる…と思つ。ついか今さつ起ききたばつかだから状況わかんねーよ。見覚えのある川があるからあの山だつていうのはわかんんだけど、ああ、体の節々が痛え、それに痒いし。よくこんな砂利の上で寝てたよな。つていうか何でこんなところにいるんだ？ オワツ！ 対岸にだれかいるよ。死んで…はないよな、何かビミョーに動いてるし。うーん、わからんねえ、何でこんなとこにいんだよ。までよ、とりあえず冷静になろう、ちゃんと考え方よ。昨日の夜は確かクラス会でえ、それで居酒屋でかなりハイペースで飲んだあと、佐藤に連れられてえ、あいつが行きつけの店に行つてえ、そこで歌つて飲んでえ、三十代半ばに見えなくもないけど化粧落とすどうなの？ つていうママさんに恋愛の相談にのつてもらつてえ、多分一時ぐらいだったかな、閉店だからとということで店を出でえ、んつ？ 今何時だ。ケータイ、ケータイ…ない。ヤツベードつかで落としたかな、たぶん一件目だと思うんだけど、今年入つて一回田だよ、ハア～誰か拾つてくれてるかなー。それで佐藤と別れてえ、あつ、佐藤がお金払つてくれたんだ。同級生でも働いてるやつはちがうよ。大学生は気楽なもんだ。そんでその後、そうだ、山田に会つたんだ。山田と会つたあ？ で

もどつか店に入った記憶はないんだよなあ、つてあれ山田じゃねえの。なにやつてんだよアイツこんなところで、つて俺もだけど。なんで一人してここにいんの？ そしてナゼに対岸？

「山田あ～山田あ～起きろー。生きてるかー」

ダメだ、全然起きん。向こう行くしかないか。え～朝つぱらから渡んの～。浅いし、幅も別に広くないけどさあ、起きてすぐだぜ、もうちよつとインターバルおこうよ。そうだー、石投げて起こそう。あんま小さすぎてもダメだから適当なやつを選んで、山なり氣味で、とりやつ、あつ外れた。もつかい、おつ当たった当たつた、でも反応なしかよ。一気に二個、一個当たつた。ダメか。えー、全部投げちまえ。おーすごい勢いで連續して当たつたよ。おつ、動いた動いた

「山田あ～山田あ～起きろー」

よつしゃ起き上がつた。

「生きてるか～なんで俺ら～んなとこ～んの～」

「ひつち見てるけどわかつてんのかな。あーまた寝やがつたよ。ふざけやがつて

「オイ、起きろ！ 普通にまた寝んな」

よし起き上がつた。

「なあー、なんで俺ら一人して山ん中入つてんの？ オマエと会つた後ぐらいから記憶飛んでんだけど」

ジーツと見てるだけでなんも反応なしかよ。アイツはびっくりするぐらいう無口だからなー。たぶん昨日もなんにもしゃべってないんじゃねーの。

「オイ、聞いてんのか、なんか言えよ、オイ！」

ダメだ。全然なんか言つ気配がねえ。ホンシトにアイツのしゃべらない度は無口のレベルじゃ済まされねーからな。高校のころも野球の県予選の応援練習、アイツが声ださねえから俺らんクラスはマジ先輩にしごかれまくつたし。アイツはボコられても最後まで大きい声ださなかつたからなー、みんな逆に感心したよ。帰るとき黒板

に「すまん」て書いて走り去つていったんだよなあ。だつたら声出せよーつて、みんなしてツツコソンだんだ。そんで次の日学校行つたら一個十円のチョコ、全員の机ん中入れてやがんの。なんじやそりや！ チョコつて！ 袋に山田つて修正液でわざわざ書きやがつて。渡すんならそのまま渡せよつて感じだよ。メンドくせえだろそつちの方が。んつ？ 手でこつち来いって合図してやがる。

「何様だ、オメエは、お前がこつち来い」

マジで！ まーた寝やがつた。

「わかつた、わかつた。今行くから待つてろよ。つたぐ」

んー別に流れも速くねえし、浅いし、サンダルだから足濡れてもいいけど、でも濡れないようだ。石の上を、おお、冷てえ、やっぱ無理か。夏でマジよかつたよ、冬とかだつたらマジでやばかつた。この水つて飲めねえかな、さつきからメッツチャのど渴いてんだけど。いやーいくらなんでもなあ、そのままつていうのはなあ、生水を。だいたいそんな清流イメージないし。まつ、ガキンころは素で飲んでたけど。いや、あのときは勢いあつたし、いや逆に今のほうが抵抗力はあるし、いや、でも。

「この水飲めつかなー」

……ハイハイ反応なしね。んつ？ なにゴソゴソして、あつ！ ベットボトル出しやがつた。

「おーいいもん持つてんじやん。俺の分も残しといて、つてなにハイペースで飲んでんだ！ オイ、バカ、俺の分も残せつてば！」 信じらんねー、あのバカベットボトル逆さまにして、飲み干したことアピールしてやがる。

「ふざけんなこの薄情もん！ そつち行つたら覚えてろよ」

あ一人が飲んでるの見たらよけいのど渴いてきたよ。これマジで飲めねえかな。

「うわつ！」

イッテエ、あちやー滑つちゃつたよ。うー手をついて被害は最小限に抑えた・・・かな？ ズボンがちょっと濡れただけ。げつ！

下にもビニヨーに染みこんできた。気持ち悪い。

「スタンダップ」

はつ？

「スタンダップ」

えつ？

「ステエーランドアップ」

やつと喋つたと思つたら英語かよ！

「なにがスタンダップだ。転んだんだから大丈夫？」とかだらフツー。しかも第一声が英語かよ」

こうなつたら一気に渡つて一言アイツに言つてやらねば。とりあえず立つて、うん、擦りむいたりはしてないな。もう濡れようが転ぼうが関係あるかー、待つてろよー山田あー。

相変わらず…

おー、相変わらず開いてんだか閉じてんだか、細い田えしゃがつて。髪型も全然変わつてねえじゃん。六・四分けのミディアム。「お前なに水全部飲んでんだよ、つーかなんで俺らここにいるの。そのまえになんかしゃべれよ」

ジーツと見てるんだつたらなんか言つてくれないかなー、あれつ、コイツ顔になんか細かい傷がいっぱい、

「お前、顔どうしたの？ 小っちゃい傷が、大丈夫かよ」

下向きやがつた。

「昨日、俺らどうしたんだっけ。お前と会つてからはどつか店入つてないよな、俺かなり飲んでたからお前と会つたあたりぐらいから記憶ねーんだけど。お前も飲んでたの？ オイ、こっち向けよ。なんで「ミニコケーション能力が低いやつなんだお前は」

うーんこりゃ喋りそうにないなあ。小学校から一緒だけど、声聞いたのつて、ホント数えるぐらいしかないよーな。よくそれでフツーに学校生活送つてたよなあ、今から考えたら信じらんねーよ。おつ、どうした急に立ち上がって。靴脱いで、靴下も脱いで、ジーンズも膝のところまで曲げて、シャツも脱いだ、うわっ！ 背中も傷だらけだ。

「背中も傷だらけだぞ。なんの傷だよ。ここそんな木の中掻き分けるところじゃねーだろ」「

なんのためらいもなく素通りされちゃつたよ。

「どこにだよ」

つて川しかないか。川に入つてつて、あー顔洗いたかったのね。

「傷しみない？」

：ハーアー、気にかけるだけ無駄だなこりや。とりあえず座ろつと。

天氣いいなあ、雲ひとつない、わけじゃないけどいい天氣だなあ、

絶好の登山日和つてやつだよ。登る気なかつたけど。チツ、やつぱ
ペットボトル空だよ。俺も飲みたかつたなあ、コーラ。コーラ！
コーラ持つて歩くやつなんて見たことねーよ。ぬるくなつたらマズ
イだろ。まあいいや、確かに降りるのに三十分もかかるなかつただろ。
がまんしよ。にしても昨日は飲んだなー、みんなと会うのつて成人
式以来か。三年ぶりだけどやつぱこの年ぐらいの一、三年はでけえ
な。就職組と学生組でだいぶちがつてくるし。高校出てすぐ働いて
るやつはやっぱ大人感がでてるよ。鈴木にいたつては子供できただ
らちよつと父親感まであるもん。佐藤は今日仕事かなー、水曜だし
なー、ド平日だけど休みとつてたのかな。こつちはまだ一ヶ月は休
みがあるよ。レポート執りかかんねえとなー、メンドくせえ。五つ
ぐらいあつたけ、問題は政治学論だよ。マックス・ウェーバーの「
職業としての政治」を読んで政治家の必須条件を述べよだもんなー、
あの先生ジビアに点数つけるつて話だから、本丸写しはヤバイよ
な。必修科目だから落とすわけにはいかねーし。マックス・ウェー
バーツでれだよ。外資系の証券会社みたいな名前しやがつて。政
治家の必須条件なんて言われてもさあ、金に汚くなくて勢いのある
やつでいいじやん。

風が気持ちいい、気を揺らす音もいい感じー、これでなんか飲む
もんさえあつたらなー。アイツは、体まで洗つてんのか。傷しみる
だろ、あれつ、今、手ですくつて飲んでなかつたか。…やつぱり川
の水飲んでる！

「お前チャレンジャーだな、なんの迷いもなく飲むとは」
俺も飲んでみよつかな、あのヤロウ、これ見よがしに次々口のと
ころに手を持つていきやがつて。…よしそ俺も飲もう。別に死にや
ーしねえだろ。

さつきは冷たいと思つたけどそうでもないな。起きたばつかだつ
たしな。今日も暑くなりそうだし、濡れたのもソッコーで乾くだろ。
手ですくつて、うーん見た感じ時はきれいだよなあ。まずは顔洗お
うつと、ふはつ、うー生き返る、気持ちいー。もつかい、ふー、あ

「完全に目が覚めた。よしつ、いよいよ飲むか。なんとか菌とか大丈夫だろうな、いや、こんなに透明なんだから大丈夫なはずだ。んうめえ、水がこんなうまいのって部活やってたとき以来だよ。あーのびが潤う。マジうめえよ、飽きるまで飲もー。そりやコイツも飲むわなあ、つーかこれなんとかの天然水とかと張るんじやん。「ここ」の水飲めるね、っていうか全然おいしいよ。お前飲めるの知つてたの? ペットボトルに入れて持つて帰れば」「そういうえば今何時だろ。

「なあ、今何時か、うわっ、バカやめる、ふざけんな、水かけんじやねーよ、やめろって、コノヤロー、オラオラ、ハツハツハツ」倍にして返してやつたぜ。

「オメエが悪いんだからな。お前は上脱いでるからいいけどよー、俺は上濡れちゃつたよ、下も乾いてないのに」

なんなんだよいつたい。

「お前時計してる? してないか、ケータイは?」

……素通りしてんじゃ

「ねえよ! オイ! いいかげんにしろよ、いくらなんでも無視しそぎだろ! 昨日どうしたんだよ。俺がなんかやつたのかよ、つーかなんで俺らはここにいんだあー」

前に回り込んだからにはなんか言つまで、ディフェンスは解かないぜ。西高のエースキラーとまで呼ばれた、自分のチームにしか言われてなかつたけど、俺のディフェンスをなめんなよ。うつ、間近で直視されると細い隙間から光る視線がちょっと怖い。なろう、俺からはねえそらさねえし、一言も発しねえぞ。沈黙がつらい。いや瞬きできねえのはもつとつらい。こいつはいいよ、少ししか開いてねえから空気の抵抗をあまり受けないんだよ、きっと。川の流れる音と木の揺れる音と鳥の声かな。静かにしてるとけつこういろいろ聞こえてくるもんだな。

ローンローン

あれ? 今なんの音だ。危ねえ、氣いとられて視線はずしそう

になつたよ。く～なんか言え、なんか言え、なんか言え～。男一人
こんな山ん中で見つめ合つてなにやつてんだか。人が見たらどう思
うよ。う～目に涙が溜まつてくる～、もう限界だ～。せめて動けよ
なー。おっ、下向いた。勝つた、勝つたぞー。あっ、またこっち向
いた。

「覚えてないのか」

しゃべつた！

「えっ、なにを？ 酔つて記憶飛んでるから、昨日なにがあつた
か、つーかこっちになんでいるのか聞こうとしてんのに、お前は全
然、つてだから無視して行くなよ。ちょっと待て！」

いきなりしゃべつたからちょっとビックリしちゃつたよ。濡れた
体Tシャツで拭いてまたそのTシャツ着たら意味がない？ その
上からシャツ着んのか。それ暑いだろ。

「覚えてないのかって、なんのことだよ。俺がなんかしたのかよ、
その傷も俺のせいなのか」 長袖のシャツ暑そー、しかも黒だし。
ちつとも夏してねえな。

「あっ、一人で行くなよ、一言かけろよな、オイ、無視すんな、な
んか言え～」

嗜み合わないっす

> ポーン、ポーン

なんの音だ。さつきから、たまに聞こえてくるけど。あーあ、三十分钟左右で降りれると思ってたのに全然着かないんだけど。こんなに遠かつたけ？ 景色はビミョーに見覚えあんだけどなー。にしても、サンダルで山道は歩きにくい。このまま歩き続けたら靴擦れっていうかサンダル擦れになっちゃうよ。暑い、腹減った、もう何時間食つてないんだる。居酒屋で、締めに抹茶アイス食つたのが最後だから…時計がないからわからんねーよ。俺が最後に甘いもん頼むと、みんな、「えーっ」て感じになるけど、なんと言われよう居酒屋での最後は甘いもんで締めるのだ。

「道あつてのかよ」

アイツはなんで後ろに下がつてんだよ。いつもがスピード遅らせ待つてやつても、それに気づいたらヤツもスピード落とすし。

「オーケイ、道あつてんのかよ。お前のほうがここのこととは詳しいだろうが。つていうか並んで歩けよ！」

俺やっぱなんかしたのかなあ。でもすごく怒つてるって感じではなかつたけど、つていつも表情が変わんないからわからんねーや。

アイツはガキンころから一人でここに来るので有名だつたからなー。俺らは昼間でも一人では来なかつたけど、大体一人で来てもなにが楽しいんだか。小学校三、四年くらいからは一人で来ることもあつたけど、まあそれは秘密基地作るのが流行つたから、そこに行くつていうことで、山ん中一人でウロウロはしなかつたよ。アイツはほとんど一人でいたから、秘密基地仲間はいなかつたはずだけど、ここに来たら絶対見かけてたから、ホンシト一人でなにやってたんだろう、ていうのも、今思い出してみたら気になるけど、あのときは別に気にも留めてなかつたなあ。

秘密基地といえば、俺らのクラスのやつらで作ったのが一番イケ

てたよ。ダンボールが主な材料だつたあの時代、板やブロックを持ってきたのは画期的だつたよなー、田中ん家が造園屋だつたから成し得た荒業だつたな。屋根にはみんな自分の家から、布やら傘やら使えそうなやつをもつてきてたけど、結局、鈴木が持つてきた浮き輪やらゴムボートやらの海水浴用品が一番役にたつたんだ。あとで鈴木はメチャクチャ怒られたらしいけど、もつ切つてしまつた後だつたから時すでに遅しだつたんだ。あの基地どうなつたんだっけ。雨が降つても大丈夫な優れものだつたんだけどなー。

「なあ、俺らが小学生のとき作った基地つてここいら辺だつたけ？お前覚えてない？」

「つて水飲んでる！ あのヤロー、ペットボトルに水入れてたのか。いつの間に。ヤバイ、あのペースはさつきと同じで一気に飲み干す氣だ。

「お前も飲まない？ ぐらいの一言もねえのかよ！ オイ、何事もないかのように飲み続けるな。あーもう！」

直接取りに行くしかねえ、くそ、サンダルは走りにくい。

「ペットボトル没収」、なんだよ、もうちょっと入つてねーじやん。全部もーりつぜ。ぬるつ！ 冷たくなかつたらフツーの水だな、こりや

なんだよ、ジーッと見やがつて、

「お前さあ、俺にも分けようつていう発想はねえのかよ。この暑さだから、アイツものぞ渴くだろうなあとかつて考えないわけ？」

オーコノ人表情変ワラナイヨ、感情ナイネ。あつそうだ。

「Are you Yamada？」

「えつ？」

クノヤロ

「お前が全くしゃべんねえから、こつちは、お前さつき英語でスタンダップとか言つたときは、やたらとはつきりした口調だつから、お前こつちはなあ、ちょっと英語で言つてみたらどうだろうと思つたんだよ。そしたら、えつ、て。素で返しやがつて。しゃべれんな

ら、はじめっからしゃべろ！」

「わかった、わかった。肩をつかむな肩を」

余計な手間かけさせやがって。ちょっと恥ずかしかったよ。なん
で俺も英語なんかで言おうと思つたんだる。ぐぐなに澄ましてんだ、
このヤロー、俺だけが無駄にテンション上げてバカみてえじやん。
あーもう、シャツの肩のところのシワを気にするなシワを。思つて
るほどパリッとしてなかつたぞ。

「で、道はあつてんのかよ」

「お前がまえ歩いてたから俺はお前に付いて行つただけだ」
ふつつーのトーンで言いやがつて、だから肩のところを触んなよ
なー、嫌味つたらしい。

「俺はもうずっとここには来てねえよ。だから、さつきから道あつ
てるか聞いてんのに、お前はなんのリアクションもないしょー。大
体、並んで歩けよな、俺がスピード落としたら、なんでお前までビ
ミューにスピード落とすんだよ、付かず離れずつてなんの尾行だよ、
つて人が話してるときはいつも向かえ！」

あつ首無理やりこっち向けたらグキッて。

「痛い。力、加減しろよ、今グキッて」

「お前がこっち向かないで、違つとこ向くからだるーが。人が話し
てるそばから違うとこ向くとはどうこいつ神経してんだ」

うつむいたまま首さすつて、ちよつとやりすぎたかな。

「とりあえず、ここまで一本道だから間違えようもないし、早く先
行こーゼ。腹も減つてるし」

空腹とケータイと相方と

はあ～、暑いわ、腹は減るは、足痛いわ、相方はしゃべんねーわ。早く家に帰りてえー。お母さん心配してるかなあ、夏休みで帰ってきたと思つたら毎晩毎晩朝帰りしてちゃーなあ。よし、今日はずつと家にいて家族団らんつてやつでもしてみるか。夕飯なにかなあ。カレーだな、カレーをリクエストしよう。うちのカレーは肉ケチケチせずにふんだんに入れるからな。野菜より肉のほうが多いなんて、わが母ながらイケてるぜ。隠し味に生クリーム入れてるみたいだけど、あれはやっぱり意味あんのかな。ポテトサラダも作つてもらおー。あ～よけいに腹減つてきた。カレーのことなんか考えるんじやなかつたよ。後ろを振り返つてみれば…もう差ができるじゃん。人の話し聞いてんのかアイツは。あー知らん知らんあんなやつ。

暑～。太陽が真上、よりはちょっと傾いてるところにある。今ちょうど一時、いや一時ぐらいかな。ケータイは、あつ、そつか忘れてきたんだっけ。店の人、キープしてくれていると信じてるぞ。

「お前、ケータイ持つてる～今何時～」

腕時計はしてなかつたはずだだけど。ポケットこせきにして、おつ持つてるぽいな。なんか、いじつてるみたいだけど、あれつ、両手で×つてどういうこと。

「電池ないのかあ？」

なんか身振り手振りしてるけどわかんねえよ、っていうかいちいち立ち止まんなよなー。あーもう、こっちから行かないとダメか。足痛いのにわざわざ戻らせやがつて。このサンダルあわねえなあ。家にあるのとりあえず履いてきただけだから。まさか山道歩くとは思わなかつたし。

「どうした？」

シャツ長袖マジ暑そー。

「ダメだ。アンテナバリゼロだ」

「なんだ、バリゼ口つて。バリサンとかは言つてたけどさあ、アンテナないのをバリゼ口なんて言わないし。そのバリはなんのバリなんだよ」

バリゼ口つて。なんだよ、そのオリジナルワードは。おーなんだなんだ、ケータイすごい勢いで振り出したよ。

「全然、入りそうにないな」

「ハハツ、振つたつてかわんねえよ。まだ、そんなことしてんのかよ」

気持ちはわかるけどな。俺もたまにやつちやうし。

「まあいいや、入んないならしかたない。とりあえず並んで歩けよ。一人しかいないんだから」

しかし、あんなに振るかなケータイを。電波入んねーんだなここは。今どきなあ。家に連絡できねえな。まつ、あと少しで着くだろ。まだケータイいじつてる。電波入んないとか言つておきながらいつまで

ポーン、ポーン

「あつ、今の音つてなに、なんの音?なんか、ちょくちょく聞こえてこない」

「…うん」

ハイハイ、ケータイいじるので忙しいと。まつたく興味なしいうことで。でもなんの音だる。にしても時間がわかんないっていうのもなんだか落ち着かねえな。起きてから一回も時計見ないなんてそういうふうないし。俺、なに落としてんだよ。腕時計しないしなあ。つていうか周りもあんまりしてない感じがするけど、ケータイが時計代わりだもん、最近は。いつたいどこまで進化すんだケータイ。着メロもはじめ三和音だったのに、十六和音になつて、今じゃ何百和音とかになつてるし。そのうえ着歌つて!鳴つてもちょっと聴いちゃうし。写真も画質どんどんよくなつていくもんない。ほとんどのデジカメだよデジカメ。デジカメの売り上げ落ちてんじやねえの。いや、それよりも動画が標準装備だし。ああいうのはなあ、よからぬ

「とにかく使うやつがある…」いつもそうだつたりして。おわっ！一瞬
田があつちやつたよ。ビックリしたー。なんなんだいつたい。計算
機は昔からついてるし、辞書はサイトにあるけど、フツーに付い
てくれるかもな。英語の方も。おお、そしたら電子辞書の役割まで。
そりや、試験のとき持ち込んじゃダメだよ。あとは、テレビは…あ
るか。そのうち、ATMとかでピツて合わすだけで、お金あらせる
ようになつたり、免許証とか、あと、じゃあパスポートも、すぐえ
なケータイ、なんでもありじゃん。でもなおさら落としちゃダメじ
ゃん。

「ケータイってホント機能ふえたよな」

「俺は、メールと電話だけでいい。というかメールだけでいい」「
いやいや、メールだけじゃ電話じやないじゃん。ケータイメール
とでもいうのかよ」ケータイいじつたまま、こいつに向ひとすらし
ない。

「お前な、世間はお前みたいにまつたく『ハリーポケーション』とらな
いつてわけにはいかないんだよ」「ふうーもういいや。会話になんねえよ。あー足痛え。ちよつと脱
いで見てみようっと。

「肩かして

「動くなよ」
つて言つても無視すると思つたからつかんでから言つ。

ため息つくなよな、そんぐらいで。うわー皮めくれてるよ。あ
ー見るんじやなかつた。

「足痛いと思つたらわー、皮めくれてるよ。お前は靴だからこゝよ
な、俺サンダルだから」

肩離した瞬間シワを気にしゃがつて。ビーセ俺の足のことは流す
とは思つてたけどさあ。言つとくけどそのシャツ砂利の上で寝てた
せいだけつこう汚れてんだよー。しかも黒だからよけいに田立つし。
あーマジ見るんじやなかつた。気になつてしまふがねーよ。
「ちょっとペース落とさない？」

だからため息つくなよな。

「足痛いんだもん。ずっと人の後ろ歩いてたんだから別にいいだろ。

そんくらい

なんだよ、コイツは。マジむかつく。あーもうー。早く家に帰りてえよ。

チョジ、コレート

「ちょっと待て、待てつたひー。」

どんどん先行きやがって。こっちのペースが遅れても待つどころか振り返りもしねえよ。俺はアイツを待つてやったのに。でもこの痛みはちょっとヤベェかも。また見てみようかな。いや、やめとこう。見たらよけいへ口む。やっぱサンダルはきついよ。つーか全然着く気配がないんだけど。もう一時間以上は歩いてない？ 暑いし腹減ったし、その前にのど渴いたよ。ペットボトルのはさつき全部飲んじゃったし。また川に戻るにはもう遠すぎるじ。こんなことならもっと大事に飲むんだつたよ。まさか、こんなに着かないもんだとは思わなかつた。アイツはホント、振り返るそぶりすら見せねえな。電波入んないんいつていつておきながらまだケータイいじつてるし。電波入んないんだつたらメールもこないだろ。にしても今何時ぐらいいだ。太陽は真上ではないけど、陽射しはまだ勢いがあるから、二時ぐらいかなー

：そんな太陽の位置で時間を予測するなんてできるかよ！ 小学校の理科の実験じゃあるまいし。あのときだつて棒の影を見てたんだよ。うーん、まさか道まちがつてはないよな。ガキのころだつて迷つたことなんてないのに。だいたい、一本道なんだから迷いようがねーよ。それとも、これぐらい遠かつたのかな。なんせ、小学校五、六年あたりから来てないから、十年ぶりぐらいか。でも、やっぱ見たことあるような景色なんだけどなあ。誰か通んないかな。平日だしなあ。いや、休日でも来ねえか。それだつたら、こっちじゃなくて、緑ヶ丘公園のほうが広場とか遊具もあつて整備されてるもんな。最近のガキも、ここには来ねえんじゃねえのか。でつかいギーセンもあるし、あとフットサルコートまで。塾もやら増えたし。俺らのときはだいぶちが

ローン、ローン

あつ、また鳴つた。今のは小さかった感じがしたけど、離れてんのかな。どこから聞こえてんだろ？木で向こう側は全然見えないし。さっきから、思つてたけど、こここの木つてこんなに高かつたけ。もしかして、いつのまにか植林とかしたのかな。いや、そんなのやつて聞いたことないし、やつてたとしても木が育つのに何年かかるはずだし。足痛えな。下が舗装されてたらもっと歩きやすいのに。あつ、でも環境的にまずいのかな。うんっ？なにこれ。チョコレートの袋？あつ、あっちにも。あつ、もうひとつ。今まで、こんなゴミ落ちてなかつたのに。どんどん続いてる。もしかして…ああつ、やっぱり！なんか、アイツのとこから落ちてつてる。山田のヤロー～、一人で食べ尽くす気だな。水のときといい、なんで、アイツには分けようつていう発想がねーんだよ。

「山田あ俺にもよこせえ！」

痛え、全力で走るとマジ痛えよ。ちょっと足引きずり氣味だし。

でも、チョコレートをゲットするためなり。

「オイ！俺にもよこせよ」

って、うつそー走り出したよ。

「待て、待て、待てつたら！」

コイツは足は速くなかったはず。今の俺でもなんとか、あともうちょっとで肩に手が、つてつかんだ瞬間振り払われたよ！ チョコレート」ときでどんな人だよ。

「チョコレートなんかで振り切ろうとするなんよ。俺、マジで足痛いんだつて！」

おつ、立ち止まつた。振り返つて、なんか投げた。でも、全然届いてねーじゃん。痛えー、ダメだもつ歩こいつ。向こいつも歩きだしたし。

つたく、ムダな体力使わせやがつて。あつ、銀色の紙、チョコレート投げたのか。いちいち屈ませやがつて、んつ、頭になんか当たつた。もう一個投げたのか。今度は緑色。

「投げないで、フツーに渡せよ。つて、言つてるそばから投げんな

！」

なんか、いっぱい投げてきたな。ムツチャばらけてんじゃん。赤に、黄色に、また銀、で青か。全部同じ紙だから、お得用パックのやつだ。全部で六個か。けっこつくれたな。

「じゃあ、頂くわ。サンキュー」

まずは、なんにしようかな。うん、赤。うわあ、溶けてドロドロ、この暑さじゃあな。袋からとれないから直接、あ、鼻についた、ウ～甘い、溶けててもオイシー。中はキャラメルか、口ん中グチャグチャ。口の中の水分全部もってかれた感じ。水飲みてえ。でも、もう一個、次、縁。これは…アーモンドだ。キャラメルよりはこっちがいいけど。のど渴く～。でも止まらない。銀色は…なにも入ってないや。歯ごたえあるのがいいんだけどなあ。ダメだ。もうこれ以上は口の中が受け付けん。あ～みずう～。こんなことなら、さつきの水もっと大事に飲めばよかつた。まさか今ごろになつてこんなにリア度が増すとは。残りのチョコレートはどうておいて。それについても、アイシップケットにずっと忍ばせてやがったのかよ。腹減つてんだから、もつと早く出せつていうんだよ。ついか川のところで出せ！

どんなケー・タイだよ

「 アイツ、なんの迷いもなく進んでるけど道あつてんのかな。 つて
いつても一本道だし。 どつか見落としてないよな。 いやいや、 ガキ
んこから確かに一本道だったはずだ。 もー、 のどの渴きと腹が減
ったのと足が痛いのと疲れたのと暑いのと、 なんかいろいろ混ざっ
て、 よくわかんねえよ。 アイツは疲れないのかな。 しゃべんねーし、
表情も変わないと、 進んでる実感がわかないな。 そのまえに、 今、 何
りかわんないと、 進んでる実感がわかないな。 そのまえに、 今、 何
時だよ。 それすらもわかんないから、 なおさらだよ。 ケータイ落と
さなきやなあ。 … アレッ？ アイツケー・タイ持つてたじゃん。 なん
か、 電波入んねえとかいうからそつちに氣いとられてたけど。 別に
時計見るのと電波はなんもカンケーないじゃん。 僕、 一言も「 電波
入る？」 とは聞いてないよな。 なのに、 アイツはバリゼロとかわけ
わからんねーこと言いやがつて。 つーか気付けよ僕。

「 オイ、 今何時だよ。 お前、 僕は時間が知りてえんだよ。 だれが電
波が入るか聞いたよ」

振り返ってケー・タイ突き出されても

「 バカ！ 見えるわけねえだろ」

腰に手えあててなにかつこつけてんだ。

「 なんのポーズだよ。 今、 行くからちょっとそこで待つてろ」

「 マジ疲れる。 アイツといふと。まあ、 時間知ったからってなにが
どーなるわけもないけど。 一時半ぐらいかなあ。 もう、 チョコレ
ート食べるのいいけど、 袋フツーに捨てていくなよなあ。 言つて
るそばから

「 チョコレートの袋捨てんなよ。 ちゃんと自分で持つてろよ」

俺はちゃんとポケットに入れてるのに。だから、 なんでケー・タイ
いじつてんだよ。 自分で電波入らないって言つといて。 ケータイ振
つてもかわんないって言つてるだろうが。 通つたあとにチョコレ

トの袋捨てていきやがつて。しかも、なんで紫ばっかなんだよ。な
にが入つてんだよ。俺にはあげないで。なぜに俺がアイツの落とし
てつたゴミを拾いながら歩かないかんのだ。あつ、色がオレンジに
なつた。ここで紫切れたんだな。そして、オレンジが続く。つて俺
にあげたのには入つてない色ばっか食いやがつて。

「偏りすぎなんだよ！俺にもその色食わせろ」
つてオレンジも切れたよ。

「で、今何時？」

「うわっ、

「いきなり目の前に突き出すなよ。口で言えぼすむことだら
つたく。

「これ、誰？ グラビアかなんかの人？ 見たことないんだけど。
あんまり可愛くねえな。時計でないじやん。うんっ？ これロッ
クかかってなくない？ キー操作無効になるんだけど
このヤロ～」

「チョコレート食つてないで、解除しろ！ 人に渡しておきながら
ロックかけるとは、なに考えてんだ」

肩ガツクリ落とすなよなあ、相手してくるヒツの身にもなれつ
つんだよ。

「解除できた？ついでに時計も表示させりよ」

いちいち、ケータイ閉めんなよな。どーせすぐ見るつてわかつて
んのに。液晶の文字デカツ！

21 : 33

「……全然あつてねーじゃん！ なんでズレてんだよ。つーかあわせ
るだろフツ

ー

うつそー、マジで。ケータイの時間あつてない人ははじめて見たよ。
「お前、よりによつてこんなときに。はあー、なんかマジ一気に疲
れたよ。ほりよ。家帰つたら時計あわせとけよ」

あーもうなにコイツ。もういや、時間なんかどーでもいい。と

にかく先に進むしか

「だから、ケータイを振るなよ。それで時間合つのかよ。もう行こ

ーぜ」

「あとでさくらこ歩いたら着くんだよ。足痛あ～。

「俺足けつこうやバイから、俺にあわせて歩いてくれない。だいたい、お前が、さつき逃げたから追いかけてよけいひどくなつたんだ

よー。」

「わがまま

「なんだとあ～いつお前のせいでいらぬ苦労をしてんのに、お前がもっとフリーにしてくれたらなー、物事はもっととスムーズに、なんだその顔は！」

口開けたままで、ふざけた顔しゃがつて。ハハツ、一步引いてや

がんの。また、肩つかまれると思つて、それ警戒しそすぎだから。

「落ち着けよ。甘いものでも食つて。甘いものは精神を落ち着けるんだから」

紫色のチョコレート渡されたけど、まだ持つてたのか。

「紫のやつが好きなんじゃないの。俺まだ持つてるから食えば、ちよつとは反省したのかな。まといいや。せつかくだからせらつとこー。甘いものがイライラを抑えるかは知らないけど、紫になにが入つてるのかは気になる。

「行こうつてぐらに言えよ。いや、ここにこじやなくって

ホント、一言がないよなー。

「ゆつくつ、行こうぜ」

と肩をつかむ。ほんやらシワを気にしだした。

「気に入んなよ、シワぐらこ。クーニングだしゃあいいだる。どうせ汚れてんだから

うわ～すつじこへこやな顔してて。田が細いかひかて表情がでんだ

な。

「チョコレート食つて心を落ち着かせねばあ

「チツ」

え、舌打ちされたよ。お前が甘いものは心を落ち着けて言つたんだろーが。腹立つなー。いかん、いかん。いちいち氣にしてたら。心を落ち着けるためにもさつそく紫色をいただきますか。この溶けてるのはなんとかなんねえかな。こ、れ、は、スースーする。ペペーミントじゃん！俺、チョコレートにこうこうやつ入れるのダメなんだよなー。ガムとかだったら大丈夫だけど。しかも溶けてるからなおさらタチわるによ。なんで、こんなのが好きなんだよ。ハズレわたしやがつて。じゃあ、今食べてるオレンジはなにが入つてんだ？あつ、またゴミ捨てたよ。

「ゴミ捨てんなって言つてるだろ。あと、なにミントが入つてんのわたしてんだよ。つーかなんでそれが一番好きなんだ」

素直にゴミ拾つたよ。

「せうだぞ。ゴミ持ち帰んのは常識だぞ常識」

「お前は、小学生のころは平氣で空き缶やお菓子の袋をここに捨てたくせに。川にだつて捨ててたじやないか」

「今さら、なにを、ガキのころの話しだるーが。だから、こうして今は地球に優しい」

「空き缶は土の中で分解されるまで何十年もかかる。ペーパーホール袋はウミガメがクラゲと間違えて食べてしまつ。」

「うつせえな！昔の話を蒸し返しやがつて。自分のことは棚にあげやがつてよー。昔のことをネチネチ。まだ俺らがガキのころはそんなに環境に敏感じやなかつたんだよ」

なんで、いちいち昔の話を覚えてんだよ。前髪の分け目がぐずれてきてるから田^だがよく見えん。ただでさえ細い田なのに。かきあげるよなー。うざくないのかよ。でも知らなかつた。ウミガメつてクラゲ食うんだ。ジーッと見て歩き出さないけど。

「わづ、わかつた、わかつたつて。お互い様とこつことで。ただ、ゴミは捨てんなよ」

ふうーどうにか歩き出した。

ちょっと降りになつてゐから、もう着くのかな。太陽、さつきよ

り傾いてきたな。陽射しはまだまだ全快だけど。草はけつこう茂つてるし、木は高くて向こう側は見えないし、こうやって、あらためて見回すと裏山なんていうほどドラエモンの裏山的軽さはないぞ。よくガキのころは自分らだけで来てたよなあ。学校も親もそんなに行くなとか言つてなかつたし。日が暮れてきてもギリギリまで基地にいたりしたしてたし。さすがに暗くなるまえにはぜつたい帰つたけど。暗くなるのにビビつてるの感ずかれないようにしてるつもりなんだけど、そのときはみんなビミョーに速歩きなの。誰も一番後ろにならにようにするから、道いつぱいに横一列になるんだよな。太田のやつがチョービビリでやたら大声でしゃべるし、間も空けないし。あいつ昼間でも基地に一人でいようとしたしがつ。二人で基地にいて、俺が外出て行こうとしたら、ぜつたい付いてたし。そういうえば、一度帰りに後ろから、オーケイって声がして誰か走つてくるやつがいて、それとなりのクラスの工藤だつたんだけど、太田すげえ勢いでダッシュしてつたんだ。この山に最後までいるのつて俺らぐらいだつたから、後ろから来る人がいたら確かに誰?つて感じにはなるけど、あーまで走り去るかね。あのときの太田は速かつたなー。あの肥満児が、運動会のクラス対抗リレーでは確實に三人抜きされるやつが。あんなに速く走れるのかつていうぐらい速かつたもんなあ。デブの底力を給食のとき以外ではじめて見たよ。山降りたところで待つてたけど、俺らを見たとき泣きそーな顔だつたし、「先行くなよなあ」って言つたら、「だつてさあ、だつてさあ」つてついに泣きだしたから、みんなでなぐさめたけど、次の日、思いつきりクラス中に言いふらしてネタにしたけど。工藤も自分のクラスで広めたから、あわや学年レベルのネタになるところだつたよ。それからは、ここに来るたんびに冷やかされたという。太田、確かに関西の大学にいつたんだよなあ。中学では同じクラスになつてないし、高校は別だつたから、遊ぶ機会なくなつちゃつたけど。あいつ関西なんかいつて大丈夫なのかよ。関西人のパワーについていけんのかね。瘦せてよかつたよなー。デブのままだつたらまちがいなく

ブーちゃん系のあだ名つけられてたな。中学のとき卓球部入ってから急激に痩せだしたよなー。ああいうのって毎日見ると気付かないと思ってたけど、中一の夏休み前にはあきらかに入学前とは別人になつてから、みんなから、お腹に虫いるんじやねーのつて突つこまれてたし。しかし、卓球でみんなに痩せるもんのかよ。サッカーが一番運動量多くて、次がバスケだったはずだけど、テニスならまだしも卓球ねえー。

「太田つてさあ、中学入つてから急激に痩せたよな。卓球でみんなに痩せるもんのかよ。アイツここに来るたんびにビビつて一人ではぜつたい来ようとしなかつたんだぜ。一人でしか来なかつたお前とは大ちがいだな」

いつしょに行く人がいなかつただけだらうけど。

「太田は確かに痩せた。アイツは根性あるからな」

「根性？ 太田はお前、そういうのから一番遠くにいるやつだぞ。痩せててもビビりはおんなかつたし。よく関西なんかに行く気になつたと思つよ」

太田はコイツと時たましゃべつてたつけ。

「太田は肝の据わつたやつだよ。俺らの世代ではヤツか竹中だらうな」

こつち向いてしゃべろよな

「竹中あ？ アイツも大人しいイメージしかないけどなー。いつしょのクラスなつたことないからあんまりよく知らねーけど。太田のどこが肝がすわつてるつーんだよ。昼間ですらここに来れなかつたんだぞ」

「アイツはな、小学校四年の五月に俺をつれて寿司屋に行つたんだぞ。二人で。しかもアイツは次々ネタを注文していつたんだよ。平然とな。タダもんじやないと思つたよ」

「…はつ？ それがどーした。たぶんいつも親とかとよく行つてる店なんだろ。寿司屋に行つたぐらいでどーしたつていうんだよ。それのどこがすげえんだよ。なに首かしげてんだ。言いたいことがあ

るなら」「

ローン、ローン、ポローン、ポローン

今最後のところ、なんか連續だつたんじや。ひとつ側から聞こえてんだ。

「この音つて、ホントなんの音？ ひとつから聞こえてんの」

足痛え、皮めくれてるところばいながら歩いてたから、別のところが擦れてきたみたい。おおっ！ なんだ、急に走り出して

「なに急にダッシュしてんだよ。オイ！」

止まつた。木見てるけどどうしたんだろ。でも、すげえダッシュだつたな。葉っぱをわつたりしてるけど

「なんかあんのー」

のどカラッカラッだから大きい声出すのすらつれえよ。やっぱおかしいな、こんなに木と草びっしり生えてたつけ。なんか昔より茂りつぶりがすごいような気が。草が道のところまできてるし。手入れとかしないのかよ。こことかは、たぶん役所が管理するんじゃねーの。縁地土木課にいる鈴木に言つておかねば。そして、発注は田中造園に頼めて言おう。田中の家にはマジで世話んなつたもんな。アイツん家に遊びに行くたんびにおばさんが手作りのクッキーやらケーキやら出してくれて。甘さ控えめなんだけどうまいんだこれが。店とかで買うやつとはちがつて独特の味なんだよねー。親父さんは夏休みとかバーべキューやってくれたり、海つれてつてくれたりしたなあ。兄貴がトラックに鉄板とかテントとか積んで運んでくれたんだ。そのトラックの助手席に乗るのがちょっとしたステータスだつたつけ。俺も何回か乗つたけど、ギアチェンジのときマニユアル動かす手つきがムチャクチャカッコよく見えて、俺も子供心にやっぱ男はオートマージやなくてマニユアルだなつて思つたもん。免許いまだに持つてないけど。兄貴が今継いでんのかな。改革改革で公共事業とかもそんないだろうな。田中と遊んでるときよく街路樹とかに「田中造園」って看板があると、アイツ興奮して「これウチがやつてんだよ、ウチが」とか言つてたなー。そんなアイツは役者に

なるつていつて、高校卒業してから会つてねえな。成人式のときも帰つてこなかつたし。でも、アイツがそういうジャンルに興味があるなんて誰も知らなかつたから、みんなビックリしたよなあ。映画よく見てるのは知つてたけど、まさか高三最初の進路相談のときに、そんなことをいきなり言つとは。親も先生も呆れてたみたいだけど。次男のアイツがあの調子だから、ここはなんとしてもこの山の管理を田中ん家に頼めと鈴木にいつておいつ。鈴木だつて田中ん家にはよく行つてたし。そうだ、アイツはお菓子をよく包んでおみやげにもらつてたんだ。じゃあなおせら、ここで恩返しするのになんの異論もあるまい。ただ市役所はいつて一年目の鈴木にそんな権力はないか。

つて、おいおい

「いきなり、ダッシュすんなよなー。なに見てんの、なんかあんの」
視線の先には

「なにこれ、なんの実？」

赤くて粒粒で葡萄をすごく小さくした感じだけど。

「こんな実がなる木があつたんだ。はじめて見た。ガキのころはこんなのが見たことつて、オイ、なに食つてんだよ！なんの実かも知らないのに。やめとけつて！」

いくらお腹空いてて、のども渴いてるからつて。

「なに素で次々とつて食つてんだよ。知らねーぞ。なに？ケータイがどうした。なんの写真。あれつ？これつて、この実じゃねーの。今、撮つたのかよ」

「ちがう。それは図鑑から撮つたんだ。この中に保存してある写真のやつなら食べても大丈夫。お前も食つてみろよ」

つて差し出されても。

「マジで、ホントに食えんのかよ。つていうかなんでそんなこと調べてあんだよ。お前、そんな趣味あつたけ」

次々木から取つては食つてるけど。「うん、ってみつかあ。のど渴いてつからさあ、正直水分のあるものだつたらなんでもいいつて

思つてたところでこの展開かよ。360度見回しても特に怪しいところは…どうなんだろ？ 口の中で噛んだ瞬間、甘さとともに水分は広がりそろではあるよな。甘いのはもういいけど。一口サイズがパクッといかせたくはなるなー。よしつ、アイツも次々食つてるし、いつてみつか。死にやあしねえだる。せーの、おつ、思つたほど甘くはないけど、逆にいいや。プチプチして歯いれたえはいいし、なにより、水つ氣があるから、のどが潤う。うん、これならいくらいでもいける。

「これいけるよ。渴いたのどにぱぴつたりだな」

「おおっ、すっげえ勢いで食つてるけど、コイツものど渴いてたんじゃん。

「のど渴いてただろ。お前チヨコレート食いすぎなんだよ。でも、マジこいタイミングでこの実なつてたよな」

「うちのことなんかお構いなしで、両手つかつて食つてるよ。けつこいつなつてるけど、ほとんど奥のほうだな。この縁のやつはダメだろ。あと黄色くなつてるやつも。」

「赤くないのはさすがにヤバイよな」

「ビミョーなのはやめとこ。柿だつて縁はダメだし。にしても一口でいけるから止まんねえよ。」

手前の方はほとんど取り付くしたな。奥の方まで入つてつてるのはちよつとなー、なんかいるかもしないし。のどもだいぶ潤つたし、別にもうそこまでして食いたくないからいつか。慣れてきたらあんまうまくないし。

「この実つてここにしかなつてないのかな。お前なんで図鑑なんか写メで撮つてんだよ。そんな植物とかに興味あつたけ。理科好きだつたけ？ 食つてばつかねえで人の話し聞けよ…」

「痛い、痛い、耳引つぱるな、鼓膜が破ける」

「大げさだろ。そんだけで鼓膜が破けるか。耳がちぎれるとかだつたらちょっとはわかるけど。この実つてここにしか生えてないのかな。こんなガキのころは見たことなかつたぞ。他にもなんか食え

そうなもんなつてねーかな

少しさ手え休めて食つのやめろよなー。口の周り真っ赤なんだよ。シャツにもついてんじゃん。黒だから田立たないけど。シワはダメでそれは気になんないのかよ！

「口の回り、汚ねえな。ついてんぞ」

髪かきわけりやいいのに。暑つ苦しい。

「髪わけろよ！ うざくねえのかよ。ついうか見てる」「ちがうぞい！」

「こちこちうるさこなあ。俺より髪長いお前が言つなよ。なんだよそのヘアピンは」

「ヘアピンじゃなくて、カチユーシャだよー。ジーパンだつづーのもつ行こぜ。のどだいぶマシになつただる。これ以上食つても腹の足しにはなんねえよ。それよりも、早く家帰つてまともなメシが食いてえよ

手前にあるのどさじひとりやがつて、持てるだけ持とつひととか。

「ほら、もう十分だろ。行くぞ」

歩きながらも食つ勢い止まんねえよ。そんなうまいか。あー、やっぱ足の別んどこも痛くなつてきた。いつそサンダル脱げつかな。いや、もう遅いか。

「わっ、いいよ、俺はもういらないつて。お前一人で食えよ
いきなり人の口のところに持つてくんよなー。食べる? ついで一
言言えぼすむものを。それをそんなんにつまそーに食べるお前がわか
んねえよ。

ポーン、ポーン

今のは通常バージョンだ。気になんないのかなコイツは無反応だけ
だ。本格的に降りになつてきたな。足にひびく。でも、もう着くだ
る。その前にケータイとりに行かなきやな。あるかな。つーか店開
いてるかな。夕飯までには着くだらうけど。家帰つたらお母さんこ
なんて言い訳しようかなー。

夕日は沈む、アナタは裸

ヤバイ！ これはマジでヤバイ！ 歩いても歩いても全然着きそ
うで着かねえなーと思つてたら、降りがだんだん平らになつてゐるな
ー思つてたら、なんか水の流れる音が聞こえるなーと思つてたら、
まあ一た河原にでたんだけど。でも、さつきと同じ場所では…ない
みたいだな。んーてことはいつのまに川と平行に歩いてて、降つ
たのか登つたのか、どっちなんだ。えつ、でもなんで。どこで間
違うつつーんだよ。一本道だぞ。油断はしてたけど。マジかよ。な
んでこーなるわけ。はじめの川のところでミスつたのかな。いや、
でも川から帰るときはあそこを通つて帰るつていうか、そこしか道
ないし。…ダメだ。どこでどうなつたのか全然見当もつかねえ。だ
いたい、こんなに時間がかかるわけねえんだよ。もう何時間歩いたよ。
また来た道戻るか。いや、もう太陽上にないし、空は赤くなつてき
てるし。今、戻るとなると、山ん中いるときに日が沈んじゃうよ。
それはだけは絶対ヤダ。それに川に戻つたとしても、そこからがま
たどうやつて帰るかが問題だもん。道は確かに一つだつたんだから。
「なあ、どうする？ うおつ」

ダッシュして川の中に！ あれつ、すぐ出てきた。靴と靴下脱ぐ
わけか、つてシャツもズボンも！

「バカ、トランクスまで脱ぐなよ。なにやつてんだこんなとき！」
状況わかつてんのかよ！」 思いきりダイブしたけど、浅いのに
石にぶつからなかつたのかな。とりあえず、俺もサンダル脱いで足
冷やそ、もう限界だよ。あいたたた、砂利の上はなお痛い。こんな
に脱ぎ散らかしやがつて、シャツのシワ氣にしてたのはなんだつた
んだよ。川の真ん中のといひにちようじ手ごろな石が、あの石に座
つて、足だけ水につけよう。あーあ、皮めくれてたとこかばいなが
ら歩いてたら、別のとこがめくれてるよ。最悪。う〜水しみるけど
気持ちいい。疲れがとれる。水もやつと飲めるよ。ふーうめえな。

水分とるのはあの怪しげな実を食べて以来だからな。あれではちやんと水分補給したとはいえんえからな。コイツはできたかもしけないけど。

「オイ、バシャバシャはしゃぐなよ」

元気だな「コイツは。ふうー、マジでどうじょう。あと一時間ぐらいかな、日没まで。なんで途中で引き返さうって考えなかつたんだろ。そうだ、コイツが前歩いてから道あつてると思つて、いや、でもはじめは俺が前歩いてたよな。それよりも、歩いてもなんか、ビニラーに見たことある風景のような感じがするから。だから、迷つたなんてまったく考えもしないつていうか、うん、今だつて、さつきの河原とちがうのはわかるけど、なんとか来たことがあるようだ、ないようだ。うつ伏せになつて動かないけど、なんのつもりだろ。水死体みたいだな。ケツ見せんなよなー、色白いなー、ガリガリじゃん。裸になつちゃいけない体だろ。なんて自然にマッチしてないんだ。でも植物にはくわしい。なんとか帰る方法ねえかな。無理やり草木の中突つ込んでつたら、すぐ道路がありました、なんてオチはないのかよ。つて言つても、草木の中通る気はないけど。裏山つて言つても決まつた道しか知らないし。つーか一本道だつたと思つんだけどなあ。あれつ？ まだ起き上がんないよこの人は。

「おい、苦しくないのかよ」

なんだよ。意識あんだろーな。ちょっと、こんな浅いところでまさか

「ブハツ。ハアハアハア、ゲホツ、ゲホツ、ハアハア」

「なに、こんなときに限界に挑戦してんだよー状況わかつてんのかフルチンでなにやつてんだか。

「トランクスぐらいい着れば」

あーもうバシャバシャと、落ち着いて上がりよなあ。あーこうしてる間にも日が沈んでいく。もう半分は木に隠れてるし。腹減つたなー。もう何時間まともに食つてねえんだろ。そうだ、チヨコレート、ポケットの中にまだ、あつあつた。あと二三つか。とりあえ

ず一個、銀色はアーモンドだったかな。溶けてるから紙にへばりつ

くんだよな。あーちがつた。なんにも入ってないやつだ。ハズレー。次は青。おースナック系だ、サクサクしておいしー。やつぱ歯はいたえないと。あーでも、よけい腹減るよ、中途半端に食つたら。

「チヨコレートまだ持つてる? 僕あと一個あるナビ食べる?」「チヨコレートまだ持つてる? 僕あと一個あるナビ食べる?」

トランクスだけはいて、戻つてくるけど

「トランクス濡れたまま着たのかよ。それだつたらスッポンポンでよかつたんじや、つてなにすんだ! バカ、やめる、うー、なに! でえーい。ハアハア」

なに? なに?

「急につかみかかつてくんなよな! ケンカ売つてんのか!」

思わず思いきり投げちゃつたよ。ああ痛えー、今ふんばつたので足が! チヨコレートも落としたし。

「下着濡れた。ずぶ濡れだよ。替えのやつ持つてないんだぞ」

「俺だつて替えは持つてねえよ。だいたい、お前が、いきなりかかるてくるからだろうが。水の中入つたら急にテンション上げやがつて。いきなり裸になるし」

座り込んだまま、うつむいて、ちょっと強く投げすぎたかな。でも、とつさのことだつたし。

「いつまで座つてんだ。立てよ

「だから、トランクス…着ただろ…ちょっと…俺もハメを外しすぎたと思うけど」

なんだ? もしかして裸になつたこと、恥ずかしがつてんのかな、今さら。

「なに今になつて急に恥ずかしがつてんだよ。テメエの裸なんか見たつて別になんとも思わないし。それだつたらはじめつからフルチンになんか、なるなよなー」

「ウオー」

「だからなんなんだよー…ばか、やめろつて、そんなことしても、テメエになんか、や、め、ろつて、こつてるだろーが!」

マジでなにコイツ。裸見られたのがそんなにマズイことだつたのかよ。あちゃーまたきれいに投げちゃつたな。どつか石にぶつけなかつたかな。大の字になつて動かないけど。

「どつか打たなかつた？」ほら

「わあ、差し伸べた手を払われかけつたよ。

「もう上がるの？」

「つむいて歩いてくなよなあ。夕田に照り返される背中が寂しい。「悪かつたよ。ちょっと強くやつすきたよ。でもお前が急に向かつてくるから」

砂利の上で横になつちやつたよ。痛くないのかな。あつ、もう一回起きて、石除け出した。やつぱり痛いんじやん。でも、体育の授業で柔道やつても引き分けが最高だつた俺にあんなにきれいに投げられるとはやつぱコイツは相当なヒヨロ男だ。また横になつた。とりあえずそのままにしておいつ。さて、どうしたもんだねつ。戻るつていうのは……ないな。山ん中で真っ暗つていつのはさすがに……懷中電灯もないし。あつても嫌だけど。今でもちょっと怖いもん。陽が落ち出していくと急に寂しくなつてきた気がする。太田すまん、あんなにネタにしておきながら、今けつこひびいてます。しかも二十三にもなつて。そのままいたほうがいいのかなあ。水もあるし。第一、足痛くてこれ以上歩く氣しないし。でも腹減つてゐしなあ。このままじゃもたねえよ。あの変な実がなつてたところまで行つてとつてくるかあ。いや、あそこまでもそこそこ距離あつたし、もう山の中はそーと一暗いはずだよ。林の入り口のところももう先は暗くて見えにくいもん。だいたい、あんな実のためにあそこまで行く気がねえ。いくら食べたつて腹は膨れねえだろつし。アイツ、チヨコレートもう持つてないかな。甘いもんはそんなに食べたくないけど、よく映画なんかで遭難したときチヨコレート少しづつ食べて生き延びたりしてたような。うーん、どつか抜け道みたいなのないかなー。あつたとしてももう遅いか。ダメだ、腹減つたのと疲れてるのでなーんも思い浮かばん。陽が沈んでいく、空が赤い。もう片

一方はもう暗くなつてきてる。…もう一泊ここですかんの？考えられない！昨日は酔つた勢いだから寝れた、つていうかつぶれただけだけど、シラフでどうやってこんなところで寝ろつていうんだよ！つてこうか腹減つて寝れねえよ。家に帰りたうい。一日も帰んなかつたらさすがに心配するよな。しかもケータイはつながんないんだから。あー昨日の酒があ。やっぱ若さにまかせて深酒はいけないなー、禁酒しよう、禁酒。コールをかけられたつて、モーのらん。あんなの時間と金の無駄だ。つて忘年会のときあたりから言つてるよう。アイツはマジで寝ちゃつたのかな。あんなやつでも一人でいるよりはずっとマシだな。トランクス濡れてるのに寒くないのかな。上もなにも着てないし。陽が落ちてくるとさすがに少しさは冷えてくるかも。一応山だし。やれやれ、よつと、アイテツ！油断して皮むけてるところに重心かけてしまつた。でも、水に不自由しないのがせめてもの救いだな。おー見事に大の字だな。脱ぎ散らかしたやつを集めて、ほらよ、シャツ一枚かぶせるだけでもちつとはマシだろ。こんなやつなんかになんて優しいんだ、俺は。マジで寝てるみたいだな。起きてるときも目が細いから近づいてみてやつとちゃんと寝てるかどうかがわかる。にしてもこの顔の細かい傷はどうしたんだろ。コイツ「覚えてないのか」とか言つてたよな。やっぱ俺が原因なのかな。全然覚えてないけどなあ。ホントに熟睡してるみたいだな、よくこの状況下で。石除けたとはいえ背中痛くないのかな。起きたときが大変なんだよ。腹減つてないのかな。あの変な実とチヨコレートだけでは、いくひこのキン骨マンといえども栄養補給は足りないだろ。はあ、なんか一気に疲れが。そりやそうだよな。今日いつたい何キロ歩いたんだつていう話しだよ。腹減つたなー、風呂はいりてえ、つていうよりベッドで寝たいよ。うーん。

夢、現実、または初恋の

太田あ、太田あ、速えよ、先行きすぎだつて。いつも待つてやつてるだろ。鈴木もなんとか言えよ。自分が遅れると走つて追つかけてくるくせになあ。あれ佐藤は？ 先帰つたんだっけ。太田、もうあんなとこに。本気だして追い抜いてやろうか。うん？ もうこんなに陽が落ちてきてる、いつのまに。俺、明日の体育攻めたいから前ね。この前キーパーやつたんだから。点とられなかつたんだから文句ねえだろ。鈴木、ちょっと急ごーぜ。太田もう見えなくなつちゃつたよ。田中も急げー。あつなに、草のとこなんかゴソゴソと。おわあーびっくりしたー。山田かよー。なにやつてんだよお前、びっくりさせやがつて。服にいっぱい草ついてんぞ。これひつつくんだよなあ。ダメだ、はたいてもはたいてもきりがねえから、家で洗濯してもらえよ。あれ、もう太陽見えないや。鈴木走ろーぜ、あれ？ 鈴木は？ わきまで後ろにいたのに。どこいったんだろ。そーいえば田中も。山田、あいつらさつきまでいたよな、なにキヨロキヨロしてんだよ、なんか探してんの？ おかしいな先行つちゃつたのかなあ、つておい山田、どこに行くんだよ、そこは道じやねえだろ。また草の中に入つてくの？ やめとけつて、暗くなつてしまつもう帰ろうぜ。山田、山田、うわー、この野郎、人が止めようとしてるのを突き飛ばしやがつて、なめんなよ。うー行くんじやねえ！ あつ、悪い強くやりすぎた。まさか倒れるとは、すまん。おい、なに急に走り出してんだ。おい待てえ、俺の方が足はかなり速いはず。ハアハアハア、おかしいな、なんかいまいちスピードが出ない。うーん、ダメだ。なんで、ああ、どんどん離されてくよ。ハアハアハア、でも暗くなつてきてるし急がなきや。鈴木たち後ろじゃないよなあ、振り返るんじやなかつた。メチャクチャ怖え。ハアハアハア、山田もう見えなくなつちやつたよ。でも、太田にも追いつかないとは。あのデブに。あいつ入り口のところで待つてなか

つたら許さねえぞ。うわーホントに真っ暗になってきた。なんか速いよ。あいつら俺を置いていきやがって。明日はぜったいキー・パー ゃんねえ。ハアハアハア、あいつら俺がキーパー好きでやってると思つてんだよ、きっと。俺がやると確かに点は取られないけどさあ。ハアハアハア、にしてもなかなか着かないなあ、こんなに遠かつたけ。早く家帰ないと、またお母さんに怒られる。昨日も遅いって言われたもんない。でも基地にいるとなんかずっと居たくなるんだよなあ。俺のに基地に比べたら、他のやつらのはガキのお遊びだよ。そうだ、これからはみんなでお金出しあって、基地用のジャンプ買って置くようにしよう。家で読んでもると、マンガばかり読んでつてお母さんうるさいからなあ。今日のご飯はなにかなあ、カレーだつたらいいなあ。ポテトサラダもあるといいなあ。なんかさつきから足が、いや腰が痛いんだよなあ。だから早く走れないのかな。体が重い。みんなもう降りちゃったのかな、痛えな、ホントに待つてくれてないのかな。太田のデブめ、鈴木と田中もだよ。山田はどうでもいいとして。でも、アイツは茂みの中から出てきたけど、あんなところでなにやつてたんだろ。アイツは変わってるからなあ。基地仲間もいないくせに、ここに毎日一人でなにしに来てんだろ。うーん、しうがないう度、特別に俺らの基地に入れてやるか。できたらジャンプ持つてこいつて言おう。あれつ、でもアイツあんまりマンガ読んでるイメージないなあ。いつもなんか本を読んでも、休み時間の間ずっと。なんの本だろう。ハアハアハア、やっぱ誰にも追いつかないよ。それよりも、まだ着かないのか。もうホントに暗くなってきたよ、後ろ見れねえよ。太田がびびるのもわかるなあ。でも、今はホントに暗いもん。ハアハアハア、腰痛い、うわー、なんか着きそうにない感じがしてきた。あつ、前の人気が、誰だろう。オーケー、待てよー、一緒に帰ろうぜー。

夜になっちゃったよ

…「うん。あれっ？　あー、やつちゃった。寝ちゃったのか。うそ、マジで。わー完全に夜じゃん。うーん、どんくらい寝てたんだろ。あー腰がいてえ。体育座り状態で寝てたから。イテテ、あー体がだるい。けつこう寝たような気もするけど。あれっ？　火がある。山田がやつたのかな。ちゃんと枯れ枝とか積まれて、本格的な焚き火になってる。火はどうやって点けたんだろ。山田はどこ行つたんだ。おいおい一人かよ。置いていくなよなあ。火があるのは在り難いけど。のど渴いたな、水飲み行こう。

イテテテテツ、足は筋肉痛だよ。太ももに力入れると痛い。あんだけ歩きやあな。最近、あんま運動もしてなかつたから。

「起きたのか」

「うわつ、なんだ、暗い中からいきなり声かけんなよなー、びつくりしたー。もう完全に夜だよ、俺どんくらい寝てた？　あの火はお前がやつたの？　なんか本格的じゃん。どうやつてやつたの？　ライターとか持つてたんだ。でも、お前タバコ吸わねえだろ。川の中でなにやつてんだ。うんつ？　なに持つてんだよ」

暗い中で黙つてんじゃねーよ。ちょっと不気味だろーが。焚き火のどこに戻つてつたよ、また無視か。やめてくれねえかな、こんな状況で。俺はとりあえ水飲んで、あ痛たた、屈むと太ももが痛い。太ももは筋肉痛だわ、足の裏は皮むけるわ、痛いところがありすぎてどつちに注意をもつてたらいいのか。ふー、昼間よりも水冷たく感じるなあ、やっぱ夜は冷えるのかな。そんなに肌寒くはないけど。こうやって見ると火があるつていうのはホッとするよなあ。なかつたら、もっとテンション下がつてただろうな。でも、思つたよりも暗いつてわけでもないなあ。まわりを見ても、形はおぼろげながらわかるし。

「お前いつ起きたんだよ、そのビニール袋はなに？　何が入つてん

の？ ってなんだ。うわっ！ 魚じゃん。なんで魚なんかあるんだよ。すげえー、もしかして獲つたの？ なに持つてるかと思えば。

こんな、ちゃんとした魚がこの川にいんだ。どーやつて獲つたの？

その竿みたいなやつは…

「作った。竿は作った」

「なんでカタコトなんだよ。

「ああ、木の枝。餌は？ 虫でも捕まえたの？ なんだよ、なに指さしてんだよ。俺？ 俺の服が、ああっ！ 禰のところ、メチャクチヤ切られてる！ ジャあ糸の代わりは俺のか？」

「ちょっとね」

「ふざけんな！ ちょっとね、じゃねえよ。フツー自分の使わなくねえ。このタンクトップ気についてんのに」

「でも、うまく作るもんだな。

「それで魚が獲れたんだから安いもんだる。三匹だぞ。こんな粗末な道具で三匹釣るのがどんだけ大変かわかつてんのかよ！ のんきにお前が寝てる間、俺はな」

「だからって、もういいよ。っていうかこの魚食えんのかよ

「なんで、逆ギレされなくちゃなんねえんだよ。

「食べる。火を通せば食える」

「その加熱処理すれば、すべて良しみたいな考えつて
だいたいはじめに寝だしたのはおめえだろ。

「正直、魚はちょっと専門外ではあるんだよね、まったくってわけじゃないけど、でさ、俺がさばいてる間、お前は枯れ枝を取つてきてよ。ほら、もうストックがないんだよ。魚食わしてやるだから、そんぐらいはやつてもらわないと。ほり、働かざるもの食つべからずつてね」

「ほらつて、ぜんぜんうまくねえよ。

「枯れ枝？ どこに？」

「山の中入つていけばすぐだよ。たくさん落ちてる」

「ええつ！ マジで」

それだけはマジ勘弁。

「マジだよ。入ってすぐのところでいいから。お前小学生のころは太田をあんなにバカにしておいて。自分は、今いくつだと思つてんだ」

「わかつたよ、行けばいいんでしょ、行けば」
つたくやつとしゃべりだしたと思つたら、態度でけえな。しかも昔のことによく覚えてやがんな。

森の中は…

「あ～イテテ、俺、足の皮むけてるつえに太もも筋肉痛なんだよ」
うーん、予想通り無視か。だんだんわかつてきただぞ。はあー、や
っぱ行かなきやなんないんだろうな。魚食いたいし、コイツは一応
火も点けたし。俺は大自然の中で、大ではないか。なんも能力な
しだしな。

「オオ！ それは万能ナイフ。そんなもの持ち歩いてるのか。こんなに機能いっぱいあつてどうすんだって昔は思つてたけど、いやこのなときになると、とても便利だよな。それで魚さば」

「あ～もづ、火、消えちゃうよ、苦労して点けたのに。早く取りに行つてくれ

なんだよ。火を点けたぐらいで。偉そーに。サンダルはつと、あつたあつた。そつと履かないど、いてて、あんまり歩きたくないのに。足の裏も気になるわ、太ももに力いれても痛むわ、俺のこの歩き方見ても行つてこいつていうかね。振りかえつて見ても、案の定まつたく見てない。だよな。つーかこつから見ても奥はメッチャ暗いよ。近づいてみてどんだけ、河原のところが、火があるからかもしれないけど、明るいかわかるよ。にしても、なんで俺があんなヤツにパシられなきやなんねえんだ。なにが働かざるもの食うべからずだ、てめえだつて文化祭のときなんの戦力にもならなかつたくせに、出し物の焼きソバ二つも食つて女子からヒンシユクかつたくせに〜。

「うわー、この中に入つてくれるのかよ。一步も入りたくないねえ。この入り口のどこに落ちてるやつでいいじゃん。うんつ、これ拾つて持つてこい。あいたた、屈むたんびに太ももが。

「オーエ、そこのはダメだよ。湿気含んでるかもしれないし。だいたい、大きすぎる。もうちょっと中入つて、木の下に落ちてるやつを取つてこーい。夜中絶やさないようにするんだから、いいぐらい

のやつを。とりあえず持てるだけもってこいよー」

なんて勝手なことを。いつの気もしないで。のヤロー、いつ

いつときはしっかり見てやがんな。ちょっとは中入んないと。

怖ええ。ホントに暗いよ。中と外で別世界だよ。なんでもいいから早く拾つて帰ろー。おっ、けつこう落ちてるな、とりあえず、もう取りに来ないでいいよう、こんな感じのをたくさん…すぐ集まりそうだな。うわあ～こいつときつて枝とか葉っぱがさあ、なんかの形に見えたりすんだよねえ。茂みからはなんか出てきそりだし。それりもちょっと先がホントに真っ暗でなんにも見えない。太田が後ろを気にしてたの今だつたらわかるよ。俺の場合は前だけ。もう、足の痛みなんか気にしてられん。さっさっと、取れるだけとつて戻ろつ。

さかな、さかな、さかな

やつは河原は全然明るいよ。中入ったあとだから、なおさらやつを感じる。枝もつと取つてくれればよかつたかなあ。ちょっとビビリすぎた。でも、さつきまで居た場所を見てみれば……一度と行く気がせん。まついつか。足りなかつたら今度はアイツを行かそう。

「取つてきたぞー、中、真つ暗だよ。なんにも見えないんだから。俺は痛い足を引きずりながら……おーすげえ、ちゃんと三枚にあります、あれつ、フツーもあこいつときつて、そのまま串に刺して焼いたりするんじゃねーの？ 切り身にしてビースンの？ あ、今枝を削つて串を作つてるわけね。でも、これに串刺したら、あれ、ほら、ウナギ焼くみたいになんない。よくテレビとかではさあ、一本丸」と刺して、それをガブッと

「うるさい。こつやつて切り身にしたほうが火がよく通るはずなんだよ。だから、魚は専門外だつて言つただろ。それはともかく、たつたこんだけしか取つてこなかつたのかよ。こんだけじゃ足なんによ」

「えー、十分でしょー。魚焼くのには。だいたい、あれ以上中には行けねえよ」

「あんなあ、夜中火は絶やさないようにつて言つただら。もつと奥まで行けばいいぐらーのやつがたくさん落ちてるのこ。お前は入り口付近でウロチョロ」

「あーうつせえなあ。だつたら、お前が取りいけよ。俺は足の皮めくれで、太もも筋肉痛なのに」

なんだよコイツ、魚を取つたぐらいで強気になりやがつて。火もおこしたけど。ため息ついてんじゃねーよ。なんでもいからせつさと焼けよなー。こつちはもう何時間食つてないと思つてんだ。そうそう、串を通していつて、おおつ、今まで氣付かなかつたけど、満月だ。でけえな、つていうか近えな。星もすごい！ こんなにきれ

いに見えるところだつたんだ。知らなかつた。そんなにここは標高高くないはずなのに。こんな絶景スポットだつたとは。みんな知つてんのかな？ 知るわけねーか。夜までここにいることはなかつたし。月なんて最近こんなにちゃんと見たことなかつたなあ。幼稚園ぐらゐのこりはよく見てたような気が…あつそつか、あのときはウサギがいるかどうかっていうので、俺はどうち派だつたんだっけ？ あーそうだ、確かにイナイ派の急先鋒だつたのに、イル派に寝返つたんだ。それは、単に大好きなサユリちゃんが、「イル」と言つたのがきつかけだつたんだ。これをみんなに感づかれないように、イル派に鞍替えすんのは大変だつたなあ。わざわざ、昨日、家のベランダから見てたらなんか影が見えた、とか、なんか月に行つた宇宙飛行士がどうのこうのだと、幼稚園児にしてはやたら凝つた嘘をついてまで、イル派に寝返つたような気が。おかげで田中、鈴木とはちよつと険悪になつたよ。あんなガキのときに、すでに男友達より女を優先してるとば。俺は男子の風上にもおけないやつだな。それでも別にサユリちゃんと仲良くなつたわけじゃないけど、まつ幼稚園だしな。

「お前はいイル派だつたけ、イナイ派だつたけ？」

「はあ？ 分けわかんない」と言つてないで、自分のは自分で持てよ

「えつ、ああ、魚ね」

「ほら、こうやって、一本、両手でしつかり持つて、そう。マメに引つくり返せよ」

「ホントウナギ焼く人みたい。こんな風に魚焼くのははじめてだよ」家でも魚なんて料理したことないけど。うー、いざ魚を見るとまた空腹感が。よし、早く焼けるー。生の魚でこんなに空腹感を刺激されるとは。焼けるー。アチッ、火に近づけすぎた。焦つちゃいけないな焦つちゃ。じつくりと中まで火が通るよう焼かないと。つゝ、わかつてるけど見てるだけで口の中睡だらけだよ。にしても、こいつにこんなアウトドアな一面があるとは。外見からは想像もつ

かん。でも、秘密基地もないくせに毎日来てたぐらいだから、あのときからこういう遊びをしてたのかな。一人で。

「お前が火おこせてマジ助かったよ。じゃなかつたら、真っ暗な中で一晩過ごさなきやならなかつたし、魚も焼けなかつたし」

「あんな。火がなくても今日だつたらそこそこ明るいよ。見ろ、今宵は満月。月明かりはお前が思つてるよりも、ずっと明るく大地を照らし出す。感謝するなら月と天気にして」

「あつ、そう」

しゃべりだしたらつていうか、夜になつてからか、態度がでかくなつててるよ。なにが、今宵は、だ。なんのセリフだよ。確かに、やけに明るいなあとは思つてたけど月のせいなのか。へえーまあすごい満月ではあるけど。

「焦げるぞ。もっとコマ田に動かさないと」

「あつ、そうだ、そうだ。つい話しに気をとられて」

「コイツは言うだけあつてコマ田に引っくり返したり。火から近づけたり遠ざけたり、体まで揺れてるよ。職人の手つきだよ。そういえば、この魚なんの魚だろう。この川に見えるやつがいるつていう話しさ聞いたことないけど、そもそも釣りに行く人からして見たことないんだけど。鮎？　なわけないか。こんなとこにいるわけないもんな。ブラックバスはそもそも食えんのか。ブルーギル、ニジマス、うーん、どれも形がちがう気がする。つていつても釣りゲームでしか見たことないけど。だいたい川魚なんてそんな知らないし。

魚、夢、現実、魚

「お前なかなか筋いいよ」

「うん？ あつ、ああ、あいがどぞいます！」

筋いいって、お前べつにその道のプロでもなんでもないだろ。でも、俺つて筋いいのかな。なんかやつてるうちに楽しくなってきたし、けつこう、この串さばきが。ウチワとかあつたらパタパタもするのに。でも、いいかもな焼き鳥屋とか、らつしゃい、とかいつたりして、常連さんと話しながら、軟骨とネギマお待ちとかつて。俺、赤ちょうちん系の居酒屋好きだし、帰りがけのサラリーマン相手に会社の愚痴聞いたりして。そうだ、コイツに厨房をまかせよう。それで、俺はオーナーで店舗の拡大のために、日々戦略を…いや、ダメだ。コイツはホントにしゃべんないから、客相手に返事もしないかもしない。頑固オヤジのいるラーメン屋レベルじゃないからな。となると山田板前案は却下ということで。つて俺だってなんの変哲もない一学生にすぎないじやん。夏季レポートも一枚も仕上げてない、単位取得もままならない。それが、なんで居酒屋の全国展開を考えてんだ。なんの知識もノウハウもないのに。あ～来年の今ごろは就職活動真っ最中、ていうか決めてないとヤバイよ。説明会にすら行く気も起きねえけど。来年は採用人数アップするっていう話しだけど、どーなんだろ？ ニュースなんかではバブルのときよりも超売り手市場とか言つてるけど、周り見ても言つほど浮かれてねえぞ。まあ、あのときの学生が浮かれてたのかどうかはテレビでの印象だけだけど。

「ほりあ、また手止まつてる」

「あ、ああオッケー」

まあ、先輩でも内定取った人はやつぱしつかりしてる人たちだからなあ。あんま、採用人数とかは関係ないかもな。ただ勝田さんに関してはなんで？ って感じだけど。あんないい加減な人が。飲み

会で幹事をやれば店の予約してなかつたおかげで、みんなで入れる店を探して一時間近くも繁華街をグルグル：そうそう入れるわけねえじゃん！二十人はいるのに。まして週末に。とはいえ、やつとで入れた店はけつこういいとこだつたから、その後も使つてゐるけど。「おかげでこんないい店発見できたし、話しのネタはできたし。結果的にはいいことづくめだな」

つてあんたが言つなよあんたが。キャンプをするからGWは空けとけつて言つておきながら、自分は海外行つてるんだもん。だいたい、一週間前ぐらいになつてもまだ、どこにする？なんて言つてる時点で、じりや流れるかなーつては、みんなも思つてたとは思うけど。まさか海外に行つてるとは！しかも、帰つてきてから聞いたら、行くのが決まつたのは出発の三日前だつて言つてたけど、もう、じつちの方はあきらめてた、といつか意識もなかつたつてことかよ。確かに先輩たちもアイツの言つことはあんまり本氣で受けとんなつては言つてたけどさあ。でも悪い人じやないんだよねえ。あれで。話しやすいというか、聴き上手というか。全然先輩風もふかさないし。あの人当たりのよさは実社会でこそ生かされるのかも。でも、経理に配属されると思つつて言つてたけど。経理！あのいい加減さで。確かに、簿記もつてるし数字見るのは苦じやないつて言つてたけど。見るの苦じやなくとも細かいチェックとかできんのかよ。採用する人もどこ見て経理に配属させようと思つたんだろう。まだ営業とかの方が向いてるんじやあ。おつ、そろそろいいんじやないの。表面、ちょっと焦げ目ついてるけど、まつ、そんぐらいのほうがカリッとしておいしいしな。

「もう、食うぞ、お先に」

熱つ、あつ、あー中はきれいに焼けてない。グニヤツつしてゐる。「中まで火通つてないよ。ペッ、気持ちわるー、外はカリッと中はグニヤツつて変な歯」たえた

もうちょっと火であぶろう。カツオのタタキは好きだけどそんな感じでもなかつたし。でも食えそうな感じではあつたな、ちゃんと

まんべんなく火が通れば。

「ホントだつたら炭火焼きしたいんだけどな、もうちょっと火から離して焦らずじっくりと。そして、コマめに動かすんだ。お前少し経つたらもう手が止まってるぞ」

火から離して、マメに動かす、と。あー時間かかりそー。中途半端に一口食べたから逆にガマンできないよ。多少生でまずくても味なくてもこんだけなんも食つてないととにかくなんでも口に入れたくなるもんだな。

「枝足すよ」

こんだけとつてきたんだからぜつたい足りるつて。寝たあとは消えたつていいじゃん。あつ、でも朝になる前にまちがつて起きたらちょっと怖いかも。にしたつて、明け方まではもつつて。5時ぐらいまであればいいとして、あと何時間だ。今は、あつそつか、ケータイないんだつた。今ごろ俺のケータイは着信ありが何件入つてんだろう。はあ、一気にへ口む。火もつと燃えろ、燃えろ、早く焼けろ、焼ける。

夏休みにこんな、アウトドア的なことやるのって何年ぶりだろ。星空の下で、火をおこして取つたばかりの魚を焼く。いいな、って言いたいところだけど、やろうと思つてやつてんじゃねえからな。山道を何キロも歩いて歩いて、道に迷つて、のど渴いたら変な実食つて。そういうば、あのポーンポーンつていうの、夜は聞こえてこないなあ。夜は鳴らないのか。なんの音かはわからずじまいなんだけど。まあ、たすがに夜は苦情がきそだもんな。でもホントになんの音なんだろ。なんで「イツは気になんないんだよ。

「あの昼間のさあ、ローン、つていう音つてなんだつたんだろ。ガキのこりは鳴つてなかつたよな。お前気になんないの。魚焼けてる？」

「全部かはわかんないけど、今食べたといせ中まで焼けてた」

「マジで。じゃあ俺のも、もういいよな」

表面はけつこう焦げちゃつてるけど。

「そうだな。心して食べよ」

心して食いますよ

「あつちーー、うん、中まで火いとおつてるよ。うめえ、あちちつ、熱いけど冷めるの待つてらんねえよ。あー、胃になんか入つてく感覚何時間ぶりだよ、お前もすっげえ腹減つてただろ、いくらなんでもチヨコレーーとあの実だけじゃあな」

おいしけど、やつぱ味がなあ。醤油かけてえつて感じだけど、それはな、贅沢つてもんだよな、でも、やつぱもう一つなんか欲しこつていうか。塩でもいいんだけどなあ。

「うん、なかなかだな。前に食べたのよりも脂がのつててうまい」「前？ 前つて何回か魚とつたことあんの？ 食える魚いるなんて、骨が、ペツ、知らなかつたし。つていうか川ではあんま遊ばなかつたよな。ガキン頃からとつてんの？ うまいけど醤油欲しいくな

い？ 塩でもいいよ。ペッ

骨が。

「塩？ 塩だつたら、ひょとしたら、ちよつと待つて、ほり」

「えつ、このビール袋のなかのやつ塩なの。…なんでこんなもん持つてんだよ。塩なんてフツー持ち歩かねーだろ」

ホントに塩？ ちょっと舐めてみて

「あつ、塩だ、塩だ。じゃつ、ちよつともらうぜ」

塩まで持ち歩いてるとは。万能ナイフまで持つてるし。チヨコレートといいポケットの中によくあんだけ色んなものを。四次元だよ、四次元。まだなんか入ってんじゃねえの…そういえばトランクスそこで乾かしてんのに、ズボンはいてるつてことは、下着でねえのかよ。スースーして気になるだろ、それだと。どうせなら、乾くまでなんもはかなきやいいのに。いや、そしたらこっちが気になるか。

「うん！ ウマイ。塩かけるだけで全然ちがうよ。すっげえうまくなるよ。塩だけっていうのが逆にいいのかも。素材の持ち味を十分に引き出してるつてなにいつてんだ俺は。いや、でもマジでうまくなるよ。お前もかけてみろって」

「いや、俺はそのままでいい。魚の本来の味を楽しみたい。こんだけ脂のつてるのはなかなかないからな。うん、口に広がるジューшибーな旨味。かといってしつこくない脂。舌にとろける食感。これはかなりのものだな」

「ハハハッ、なに俺のいったことに便乗してんだよ。食いしん坊か。お前は。でも、確かにウマイよ。腹減ってるからかもしないけど。いや、それ差し引いてもウマイ氣がする。川魚がうまいのかな。海のしか食べたことないし。鮭は川か。でも海に行つてるときもあるから。あつ、ウナギがあつたな。でもあれはちょっと別枠だよ」

ウナギは魚つていつもな。ちょっとちがうし。見た目も、食べた感じも。でも、これはなんの魚なんだ。素で食つてるけど大丈夫かな。食えなくはないか。こんなにウマイんだし。ただ、サバの味とあんまり変わんないような気がすんだけど

「これって、なんて魚？ 鮎とかではないよね」

一心不乱に食つてるよ。お前もそーと一腹減つてたんじやん。

「気にするな。取つた。焼いた。食つた。ウマイ。それ以上なにがいる。ペツ」

「あつ、バカ、骨わざわざこいつに向いてはくなよ。なに大自然に生きるみたいな」と言つてんだ。魚の名前聞いてるだけだろーが「自分だつて知らねーんじやん。そういえば、さつき魚は専門外とか言つてたし。じゃあ、なにが専門なんだよつて話しだけど。

「もう一つもらひつけ」

いちいち串をして、また焼かなきゃなんないのがなあ。めんどい。「別に切り身にする必要なくない。一匹刺したまま立てとけばいいんじやん。そしたら、すぐ食えなくない？」

「うへん、ムラができるよ」

「そんな大きくないから大丈夫だつて。やつぱりテレビとかで見る川魚は一匹丸ごと焼いてるよ、思い出したけど。焼けるまで待つてるあいだもウザイし」

だいたい手で持つてコマめに動かしすぎると火がとおつてないんじやないのか？

「でも、手で持つて動かすほうが…それっぽいし」

「それっぽいってなんだよ。べつにその道極めようなんて思つてないし。早く食えるにこしたことねえだろーが。全部刺して立てるぞ」それっぽいって、お前のサジ加減じやねえか。俺もなに言われるがままでしたんだろ。ちよつと、夜になつてから主導権にぎられっぱなしだつたな。確かに火を点けたのと、魚とつてきたつていう実績はな、認めるけどさ。とりあえず、串はコイツがたくさん作つてあるから刺していくて

「骨こじら向いてはくなつてば、たくつ」

ちよつと言ひ負かされるとすぐ反撃しようとするからな。小せえ男だ。

「これ刺してつてよ」

つてやるわけねえか。ホント氣分屋だよなー、急にテンション上がったり、黙り込んだり。

「バカッ！ 生はやめとけって！ それはちょっとヤバイから。わかつた、わかったよ。お前の分は好きにしろ。俺は手えださねえから、な。そうそう、吐き出せ、吐き出せ。じつに向くなつてば」
生でいくかー。」
「ういうときは行動で抗議しようとするからなー。」
一言、俺のは置いといてくれって言えばすむものを。それに早く焼かないと痛むと思うんだよね。立ち上がって、水飲みにか。だろーな、まずかつただろーしな。でも、アイツよく枝をあんなナイフできれーに串にするよな。手先器用なイメージなかつたけどな。

夏の思い出

「ガラガラ」
ハハツうがいまでしてるよ。

「ガラガラ」

一匹通すのは難しいな。

「ガラガラ」

頭からかな、尻尾からかな。

「ガラガラ」

なんで切り身なんかにしたんだる。

「ガラガラ」

単に包丁さばき、あつ、ナイフか。見せたかっただけなんじや。

「ガラガラ」

手が魚くせえ。洗つてこよ。

「ガラガラ」

「うるせえよ！ いつまでやつてんだ！」

「ガハツ！ ガハツ！ なにすんだ！ 生でいつたから、口の中に寄生虫でも入らなかつたか、心配だから」

「だったら、生でいくなよ。あの立つてる一本は俺のだから。お前のはそのまま置いてある」

思いきりつり器官に入つたか。

「戻るんだつたら、魚見てて」

まつ、大丈夫だとは思うけど。水冷てえ、昼間より冷たく感じるよ。陽が落ちてるからそう感じてるだけかな。いや、ちょっとだけ肌寒い、寒いってほどではないか。でも夜はやっぱ温度下がるんだな。山だけあつて。焼けるまでしばらくかかるだらつから、あの石のどこで座つてよう。

「うやつて足だけつけてると、疲れがとれてくよ。アイツはコマめに歩動かしてるみたいだな。刺したままほつときやいいのに。に

しても、やつぱすげえ月だよなあ。こんな近いもんかよ。星もいくつあるんだって話しだよ。星座とかに詳しかつたら、あれとあれが繋がつてオリオンとか白鳥とかわからうな。アイツは星座には詳しくないのかな。林の中はマジで暗いよ。よくさつき入つてたよなあ。月で明るいとはいえ、火がなかつたらここにいられなかつたな。火だけがやたら存在感あるよ。

火があ。小学生のときのキャンプファイヤーはすぐかつたよなあ。あれなんで行つたんだっけ？ 学校のではなかつたと思うんだけど。あー町内会のやつだ。夏休みのイベント。あれにミキちゃんが参加するとは想像もしなかつたなあ。町内全然ちがうし。あとから聞いたら別の町内のやつでも参加してよかつたつて話しだけど。まさかねえ、運命的なものを感じたもん。ガキながらに。しかもうまい具合に俺のとなりだつたんだよなあ。つーか今にして思えば確信犯的にそこに寄つてつたのかな。たくさん話した気もするんだけど、内容が全然思いだせん。そーと一舞い上がってたんだろうな。なんせ学校ではほとんどしゃべつたことなかつたし。本ばつか読んでるイメージがあつたなあ、暗いってわけじゃなかつたけど。そうだ、マサミの野郎が一人の話にいちいち入つてきやがつて。なんで女つて、カワイイ子の周りに普通よりやや下ぐらいの取り巻きがいるんだよ。しかも、なぜだか俺はあの女と夏休みの宿題について話したのは覚えてるぞ。なんでそんなどーでもいいことを保存してんだ俺の頭は。それでも、学校よりは邪魔がいなかつたらいい話したような。あつ、そうか、二人が本の話しをじだしてからは入つていけなかつたんだ。俺はあの頃はまったく本読まなかつたから。ジャンプと口コロに心奪われてたもん。ジャンプには今もだけど。でも、火の明かりに照らされて笑つてる顔はムチャクチヤ可愛かつたよなあ。本氣で結婚しようと思つたもん、ガキながらに。でも、まさか、まさに上がるときに転校するとは。しかもわかつたのが始業式終わつてのクラス発表のとき。自分の名前より先にミキちゃんの名前探してたもんな。そしたら、マサミが「ミキさあ、親の仕事の関

係で急に転校しちゃつたんだよ。春休みに決まつたからアタシ見送りにも行けなかつた。電話でだけってオノレのことはどうでもいいんじゃ。ああ、なんでこんなことに！ せつかくあのキャンプファイヤー以来少しばかり学校でもしゃべるようになつたのに。マサミのやつもなんの前触れもなく言つんだもんなー。親の仕事の都合で好きな子が転校なんて実際にあるんだ、って今になつてみると思つよ。あれからミキちゃんはどうしてんだろ。すっげえ可愛くつとうか、キレイなおねえ系かな。あのときからすでに落ち着いて大人ぽかつたし。うーん、もてるんだろうなあ。あー彼氏はどいつだ。考えるだけで腹が立つ。でも、ここはひとつ大人になつて素敵人と幸せになることを願いつつ、いや待てよ。もし、すっげえ遊び人になつてたらどうしよ。夜な夜な遊びに出て、ナンパされでは付いていき、男を次から次へとつかえひつかえ、一股三股もお構いなしだつたら。…やめよう。なに思い出を自分で汚してつてんだ。あーあ、なんとか夏終わるまえに女ゲットしねえとな。あの花火大会でのケイスケとのナンパはうまくいったんだけどな。アイツ途中でつぶれたから結局別行動にならなかつたよ。電話番号聞けなかつたのは痛いな。まさか、終電で帰るとは。急に走りだしやがつて。もう夏は残り少ない、急がねば。

手上げてる。焼けたみたいだから戻るか。よつと、いてつ、また皮むけてるの忘れてた。

「おおつ、焼けてる、焼けてる。少なくとも表面は。んつ、なんだよ、お前も切らないでそのまま刺してんじやん。たくつ、素直じやないんだから」

なーんだよこのパクリ野郎。でもあんまり言こ過ぎるとまた、スネるからやめとこ。なんにしても、やつぱこの方がおこしゃうだし、キャンプって感じするよ。ではでは、一口

「んつ、中まで火とおつてるよ。うんうん、全部とおつてるみたい」これだよこれ。塩もかけて

「うめえ、やつぱ川魚はこいつでなあや。なにより食い」とえがあるよ

「そんなんに…うまいのか」

「おおつ、切り身のときよりもかなり。いや、別に切り身がまづかつたつてわけじゃないんだぜ、気分だよ気分」

危ない危ない。ついうつかり。

「すまんな。俺のせいで。なんも知らないくせに、調子こなつちやつて」

「いや、気にすんなよ。だいたいお前がとつてきた魚だし、火もお前がやつたんだし。俺はそれのおこぼれを頂いてるだけなんだから」なに急にネガティブになつてんだよ。

「お前のはまだ焼けてねえだろ？ 俺の一本食えよ。いいつて、もともとお前がとつてきたのだし。食えよ」

なんだよ魚じつと見つめて。

「やっぱ俺じやダメだな。リーダーはお前がやるべきだよ。俺は知識はあるけど、それも付け焼き刃だし。一瞬の判断力や局面局面での冷静さ、なにより人心掌握術。すべてにおいてお前のほうが指揮

富としての資質に優つてゐるよ」

「リーダー？ 二人しかいねえのにリーダーもなにもあつたもんじやねえよ。オイオイ。なに急にブルー入つてんだよ。いや、お前のサバイバル能力にびっくりしてんだぜ。俺は。食べれる実を調べてあつたこととか、チヨコレートを持つてたこととか。ほら、なによりこの魚だよ魚。あの程度の装備でこんだけ取つたんだからすげえつて。お前はこそリーダーに相応しいよ。よつ、リーダー！」

アホらしい。

「いやつ、うん。まあ、これからはお互ひの意見を尊重しながら行動をしていこう。たのんだぞ！」

「ういっす！ わかりました、リーダー！」

もう立ち直つた。もうちよつと落ち込ませとくんだつたな。人心掌握とか言つてたけど、それができてたら苦労してないつて。おーすっげー勢いで食いだしたよ。ほらこっちの方がウマイだろ。

にしても星すげえな。ホントなんでこれに今の今まで気付かなかつたんだろー

「あつ流れ星！ おーすげえ。はじめて見た。生で。うわっ、やつべー、チョーかんどー。なに見れんだ。こんなところで。あー、願い事間に合わねえつて。一瞬だもん」

「はじめて…はじめて見たのか流れ星。あんなもん多くはないけど、そこそこ流れてもんだぞ。お前はいつたい今までなにを見てきたんだ」

「えー、そうかあ。なんか南の島とかで見るつてイメージじゃん。

流れ星つて

「そんなことないつて。ここでもけつこつ見えるよ。ずっと見てたら落ちてくるつて

「へ〜」

そんなに見えんのか。しばらく上見てよつと。やつだ、次のときのために願い事考えとかないと。こうこうのつてあんま欲深いのはダメだからな、控えめに控えめに。就活うまくいきますようにつけて

「いつのは…いや」の御時世になんにもやつてない俺がちょっと虫が良すぎるよなー。彼女できますように…いや、それは自分の力で手に入れるもんだ。神頼みするもんじゃない。うーん、卒業ぐらいいにしどくか。内定とつたけど卒業できませんでしたつていうのが一番最悪なパターンだからな。

「お前はなにする？」

「ふあにが？」

魚食わえたまま話すなよ

「願い事だよ願い事」「

はからんなんの？ シ～」

「流れ星だよ。また落ちてくんだろ？」

「シ～、そんな習慣、シ～ないしなー、シ～、別に願い事自体ないし、シ～」

「骨はさまたの？ 汚ねえな、早く取れよ。習慣ないって、ガキんとき七夕とかやつたじやん。短冊に願い事書いてさあ、竹に吊るしだろ」

俺なに書いたんだつけ。

「シ～、あれは星にじやなくて、シ～、あつ取れた。あの一人が久々に会うから、まあせいぜい幸せのお裾分けつてところだろ。俺、あれにも願い事書いたことないし。どうぞ末永くお幸せに、つては書いたことあるけど」

また骨吐きやがつて

「こつち飛ばすなよ。汚ねえな。あの一人つて友達みたいに言うな。しかもなんて嫌味つたらしいこと書くんだ、ガキの分際で。おめえみたいな不信心なやつは罰があるぞ」

「そんなことぐらいで罰あたるなんて、心の狭いカツプルだ。だから、あいつら」罰があたつて一年に一回しか会えなくなるんだよ

「もういいよ」

言つだけ腹立つてくる。なんでこんなに素直じゃない子に育つちやつたんだろ。よくこんなやつと一緒にいるよな、我な

がら関心するよ。『イツに話しふるぐらいなら流れ星落ちないか見てた方がいいや。あつ、ちょっと今食べたとこ生っぽつかつた。

そもそもなんでパンパン？

ふうー食つた食つた。こんなに魚だけ食つたのはじめてだよ。途中からもう飽きてたし。やつぱサバにしか思えないんだけどな。とりあえず腹は膨れたし、一息ついたな。ちょっと横になりたいけど石が。少しでも除けよ。コイツはちゃんと除けないで横になつてるけど、痛くないのかな。あ～気持ち悪い。そりゃ、ほとんど一日なんにも食つてないのにあんだけ魚食えばな。しかも塩だけで。とりあえず、背中から上のどこだけ除ければいいか。痛つ、石まだ残つてた。んしそつ、はあ、なんかやつと落ち着いたつて感じだよ。

今日一日長かつたなあ。朝起きたらいきなり河原で、暑いなか山道を日本語がイマイチの人と何時間も歩いて、ケータイないから時間はわからんねえし、腹減るわ、のど渴くわ、そしたら、変な美食うわで。足の皮はめくれるし。そんでも河原。なんなんだ今日一日は。つていうか明日はどうすんだろ。もちろん帰るけど、今日あんだけ歩いて着かなかつたのに、とりあえずまた最初の河原まで戻んのかな。え～それだけでもどんだけ歩くんだつて話しだよ。俺の足はもう限界だよ。裸足で歩くかー、いやあ、それはムリだー、かといつてサンダルはもう。ああ考えるだけでマジへこむよ。ケータイの電波が入ればなあ、コイツのケータイですぐ誰か呼ぶのに。あーあなんでこんなことになっちゃつたんだろ。昨日の夜・ダメだやつぱコイツと逢つた後はなんも思いだせん。あつ、そーいえば結局なんでここに来ることになつたのか聞いてねーじやん。いろんなことありすぎて一番肝心なことを「なあ、誰がここに来よつて言い出したんだよ。俺？」でも俺そんなこと考え付かないと思つんだけどなあ、オイ、寝たの？」山田

なんだよもう寝やがつたのかよ。ホントよくソッコーで寝れるよなこんなところで。まついや、今さらそれ知つたからつてどーなるわけでもないし、明日聞こいつ。

「ふあー、ああ」

俺も眠くなつてきたな、夕方けつこう寝た気もすんだけどな。起きたら足筋肉痛になつてるぐらいなんだから。ケータイがないから何時間寝たかもわからんねえよ。でも、別にすることもないし、寝るしかないよな。

星がきれいだな。あの三つ並んでんのがオリオン座かな、あれっ、でもあつちも三つ並んでる。あれも三つといえば三つかな。全然わかんねえや。すっげえなあ、この星見たのだけはよかつたけど、あつ、落ちたよ。あゝなんだよ不意をついて落ちてきやがつて。また願い事間に合わなかつたし。いつ落ちてきてもいいように油断しないように、オツ、なんだよ連續でくるか。全然パターンなしだな。でも、さすがにもうしばらくはこないだる。来そうな気配がしたら、もうその時点で願つとこづ。卒業できますよつにって。家は心配してんだろうなあ。さすがに一日続けてはなー。お母さんご飯作つて待つてただろうなあ。今日のおかずは、なんだつたんだろう。ホントだったらカレー食べるはずだつたのに。帰つたらとーぶん魚はいいくて言つとかないと。でもフライだつたらいいかな。さつさとレポートにとりかかんねえとな、なにからやろうか。政治学？いや、あれはちょっと学校の図書館に行かないで、現代経済学はいけそうだな、誰か一人経済学者を選んでどうだらこうだらだつたつけ？あの先生は出したらとりあえず単位はくれるつて話だから、大丈夫だろ。あと歴史学もなんとかなりそうだし、そうだ、音楽史があつた。他学部科目でとつたんだ。クラシックずっと聴いてるだけでいいつていう情報を入手したからとつたけど当たりだつたな。ほつとんど寝てるけど。クラシック聞きながら寝れる授業があるとほつ。先生は異様なテンションで語つてるけど、やっぱ芸術系の人はみんなそうなのかな。課題はシユーベルトの未完成交響曲を聴いての感想だつたけ。「未完成」っていうのもすげえタイトルだよな。未完成は世に出しちゃダメだろうつて感じもするけど。そんで、あとは、ああ、ねむー、哲学か。あれの課題は……えーと……なんかの本

読んでの……感想だった……いや、それは現代思想……だったよつ……な

おつかしいな、まだ着かねえよ。のど渴いたな、川はすぐちやつたし。あつ、山田あ、どこ行つてたんだよ。先行つたんじやなかつたのかよ。なんでいつも横の茂みから出てくんの？あれつ、ミキちゃんも、なんでこんなところに。ここなんかに来るんだ。なんで山田なんかといつしょにいんだ？ あいてつ、なんだマサミもいたのかよ。お前背中強く叩きすぎだよ。女がなんでここにいんだよ。じやあ、みんなで帰ろうぜ。暗くなつてきたし……

んつ、なんだどこにだよコイツは。こんな時間に。背中んとこ痛え。火が小つちゃくなつてんな。まつ別にいいか。なんだ、ショーン便かよ。なにわざわざ川でやつてんだよ。つたぐ……

あれつてさあ、鈴木と田中じやない？ おへい鈴木い田中あ、なに先行つてんだよ。もう帰つたかと思ったよ。アツ、なに、それ今週号のジャンプ？ もう入つてたんだ。バカ、ドラゴンボールの話しそんなど。俺まだ読んでないんだから。えつ、ちがうよ。さつき会つたんだよ。大丈夫だつて、墓地はマサミ達には教えてないから。誰が女なんか入れるかよ。山田？ 山田にも言つてねえよ。本当だつて、あの場所は誰も知らないつて。でさあ、太田はいつしょじやないの？

「ボーン、ボーン、ボーン、ボーン」

なんだよ、るつせえな。夜も鳴んのかよ。なんなんだいつたい。暗いな、火消えてんじやん。あれつ、アイツ居なくない？ 暗くてよくわかんないけど。まついいや、寝よ寝よ。こんな中途半端に起きてなにしろつづーんだよ。トイレ行きたいし、のども渴いたけど我慢しよつ。寝なきや、寝なきや。背中痛えな。肩のところも。……

もう真っ暗だよ。ちょっと急がない？ 後ろから誰か走ってきてない？ 誰だろ。なあ〜んだ太田かよ。びっくりさせやがつて、汗かいてるよ、すっげえダッシュしてきたんだろ。怖いから。太田、今日はそーと一暗くなってるけど遅れんなよ。よっしゃ走れ〜、ハアハア、太田もう息切れで走れないかなあ？ おおつー走つてるよ。やるな。鈴木と田中は、どこ行ったの？先行つちやつた？さつきまでいたと思つたんだけどな。マサミ速えな、飛ばしすぎだよ。ハアハアハアミキちゃん置いていくとは薄情なやつだ。付いてこれるかな、ちょっとスピード落とそうつと。ハアハア、ミキちゃんなんで笑つてんの？ 怖くないのかな。太田は、ダメだもう見えなくなってる。かわいそうだけど、入り口で待つてやるから許せ。だつてお前は絶対俺らのことは待たないんだから。だから山田どこに行く気だよオメエは、茂みの中入つてつてどーすんだよ。つてもう入つてつちやつたよ。ミキちゃんと俺だけか。走るの意外と速いんだな。そんな速かつたけ？ ズット笑つてるけど暗いの怖くないのかな、俺でもけつこづビビッてるのに。えっ！ こんなときに本読むの？走りながら。転ばないかな。ローン、ローンまたあの音だ。なんの音だろ。ここに来るとだいたい聞こえるんだよな、ミキちゃん気にならないのかな。あつ、前に誰かいる。あれは、太田だ。なんで、いつの間に前に、つていうか瘦せてる太田だ。そうだ、アイツは中学入つてから急激に瘦せたんだつた。卓球で。でも差が縮まらないどころかまた見えなくなつた。痩せてからはやっぱ速えな。つとミキちゃんは、いない！ おいてつちやつたかな。ジーしょ。戻るうか、いや、でも。うん？ 茂みから「ゴソゴソ」と、やっぱテメエかよ。山田、ジーしょ、ミキちゃんが、なんだよ、手引つ張るな。なに戻るのか。ええつー。今から。マジで暗いぞ。わかつた、わかつたよ。行くから手離せ。その代わりミキちゃん見つけたらダツシューで帰るからな。遅れんなよ。行くぞ！

うん？ なんだ？ 眠しいな。イテテ、肩から腰から、虫にも刺

されて痛いわ痒いわ。やつぱこんなところで寝るもんじゃねえよ。ア
イツはどこ行つたんだ、夜川に小便しに行つたのは見た感じすんだ
けど。俺もトイレ、痛たた、筋肉痛、もつとひどくなつてるよ。立
ち上がんのも一苦労だ。ううん、ああ、まだお腹にはなつてないみ
たいだな。太陽は上にないし、陽差しの強さからしても。痛つ、足
の皮もむけてるんだつた、砂利の上なのに思いつきり踏んじやつた
よ。踵に重心かけながら歩かないよ。あつ！あの野郎また向こう岸
にいやがる。なんで夜の間にわざわざ移動すんだ。わけわかんねー
よ。しかもトランクス一枚だし。

「三」

別にいつか。起こしたといひでビーなるわけでもないし。寝かせ
とこ。おおつ、水は相変わらず冷てえな。

「ふあ～あ」

どんくらい寝たかもわからんねえよ。とりあえず、ああ、朝起きて
一発目の小便を川でやるつていうのも、つて向き反対だつた。方向
転換、川上に向かつてやつちやついけねえだろ。ふ～朝から一人で
なにやつてんだ俺は。

んしそつ、顔洗おう、ふはつ、ふ～目が覚める。ん～水がおいし
い。まだヤツは起きそつにねえな。焚き木の木、結局足りたんじや
ん。だいたい、火を絶やさないようにするつて誰かが起きてなきや
無理な話しじゃん。なんのために暗い中とつてきたのか。

くポン、ポンく

今日、一発目かよ。いやつ、一回起きたときも聞いたような。あれ
つ、それとも夢でだつたかな？夜は鳴らないだらうしな。

さて、どーしよ。とりあえずアイツ起こしに行くか。また石投げ
ても仕方ないから、向こうまで行つてやるか。まさか、一日続けて
起きて早々に川を渡ることになるとは。

痒い、痛い、だるい。もうなんも食つのないけど、朝は抜きか。
また魚獲れないかな。雲一つないよ。今日も天気はよさそうだなー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783f/>

うらやま

2010年10月8日13時21分発行